役・役・役・役

◎登場人物

私＝光石　氷雨（みついし　ひさめ）・・・３１歳。商品比較記事のウェブライター。

光石　四方司（みついし　よもじ）・・・５０歳。氷雨の夫。元巡査部長。

春日　十夢（かすが　とむ）・・・３１歳。氷雨の小・中学校時代の同級生。高校教師。

丹下　蒼一（たんげ　そういち）・・・大手出版社勤務。４９歳。

猪鹿野　蝶羽（いかの　あげは）・・・氷雨の父・五郎の愛人。スナック勤務。３８歳。

種本　札央（たねもと　れお）・・・　３９歳。警視正。四方司とは対立関係にあった。

菅原　朱美（すがわら　あけみ）・・・四方司の元部下。警部補。３３歳。

柵田　短（さくた　みじか）・・・氷雨の友人。氷雨の小・中学校時代の同級生。３１歳。

月岡　拓見（つきおか　たくみ）・・・文学部の大学生。２１歳。

小野　風音（おの　かざね）・・・真実を知る女。　２４歳。

◎名前のみ

光石五郎（みついし　ごろう）・・・氷雨の父。１年前に死去。（当時７２歳）資産家。

花輪桜（はなわ　さくら）・・・氷雨の母。１０年前に死去。（当時４０歳）

光石三雪（みついし　みゆき）・・・１３歳。氷雨の娘。

名前の由来は花札の役

東京近郊。公営霊園。とある墓の前。

○プロローグ　私たちの脳内

抽象空間。私と風音。

風音　なぜあなたはあなたなの？
私　わからない。
風音　なぜあなたはあなたなの？
私　私は私がわからないの！
風音　なぜあなたはあなたなの？
私　私は別に私じゃなくったっていい！
風音　なぜあなたはあなたじゃなくっていいの？
私　私は私が嫌いなの！
風音　あなたはあなたが嫌いなの？
私　そう。
風音　どうしてあなたはあなたが嫌いなの？
私　え？
風音　あなたがあなたを嫌いなのは、あなたが別の何かになろうとしているからじゃない？
私　意味がわかんない！
風音　あなたがあなたを嫌いなのは、あなたがあなたを別のものとして見ているからじゃない？
私　別のもの？
風音　好きも嫌いもあなたの心が外部のものに反応して起こる現象でしょう？
私　何言ってるの？
風音　あなたがしっかりあなたなら、あなたはあなたを好きになったり、嫌いになったりすることはないんだよ？　なぜあなたはあなたなの？
私　だからわからないって言ってるでしょ！
風音　あなたはあなたのことを好きな人が好きでしょう？
私　そりゃ、そうでしょ？

風音　あなたはあなたの嫌いな人を好きな人が嫌いでしょう？
私　だから、そりゃ、そうでしょ。
風音　あなたがあなたを嫌いだと、あなたのことが好きな人は、あなたの嫌いな人を好きな人になっちゃうよね？
私　もうやめて。何もわからなくなる。あなたは誰なの？
風音　私はあなたではないもの。だからあなたは私を嫌いになってもいいし、好きになってもいいの。
私　あなたなんていらない。
風音　え？
私　あなたなんていらない！　私なんていらない！　私は私じゃなくていい！　あなたもあなたじゃなくていい！

私と短。

短　変な女の子？
私　うん。怖くない？
短　ついてくるの？
私　そう。
短　話しかけてくるの？
私　こない。でも、なんか話したそうで。
短　話しかけてみたら。
私　え？　嫌だよ。怖いもん。
短　そんな可愛いストーカーいる？
私　ストーカーって感じではないんだよなぁ。
短　じゃあなに？
私　わかんないけど、座敷童とか？　怖いけど悪いものではないというか。
短　じゃあ尚更、思い切って話しかければいいのに。
私　短はそういうのできるかもしれないけど、私には無理。こないだも夢に出てきて怖かったんだから。
短　夢にまで？
私　「なぜあなたはあなたなの？」ってすごい聞かれてさ。

私と拓見

拓見　変な女？
私　うん。怖くない？
拓見　ついてくるの？
私　そう。
拓見　話しかけてくるの？
私　こない。でも、なんか話したそうで。
拓見　話しかけてみたら。
私　話しかけてみた。
拓見　なんて？
私　何か用ですかって。
拓見　よく聞けるな。
私　そう？
拓見　そしたら？
私　そしたら友達になった。
拓見　は？
私　風音って名前なんだって。
拓見　他は？
私　他？
拓見　他の情報だよ。
私　わかんない。
拓見　その風音って人の目的は？
私　わかんない。
拓見　よくそれで、仲良くなれるな。
私　小説が好きだったんだよね、その人も。
拓見　え？
私　拓見と仲良くなれたのも小説がきっかけでしょ？
拓見　そうだけど、それとこれとは話が違くない？
私　そうかもしれないけど。就活の話をさ。
拓見　就活？
私　社畜になりたくないって。言ったら。

拓見　言ったら？
私　「棒にはなりたくないよねー」って。
拓見　安部公房？
私　そう。そういう友達ってなんかいいじゃん。
拓見　もう友達なの？
私　連絡先も知らないけどね。
拓見　俺はお前が怖いよ。
私　そうかな？
拓見　きっと自分がどうなってもいいと思ってるから、そういう危ないことができるんだよ。
私　え？
拓見　世の中と自分との距離を取りすぎてる。
私　なぜあなたはあなたなの？
拓見　なに？　哲学？
私　夢に出てきた風音に言われたんだよね。

○父が死んだ　モノローグ

私の独白。

私　父が死んだ。病院の一室で、薬を飲んで自殺。１３年前事故にあって、植物状態。でも1日だけ、意識が戻った日があった。その日に毒を飲んで自殺。意識が戻って、このまま苦しむくらいなら、と思った。当時私は３０歳。私もようやく一人前になったかなー、なんて思った時だった。「世代交代。」そんな言葉が頭に浮かんだ。女は一人前になると女としての役目を終える。娘が生まれて、１３年。これからは娘の時代になるのだ。そんな予感。母という存在になんてなりたくなかった。ずっと女でいたかった。でもそれを生命の誕生が拒んだ。私が生きる理由を別の生きる理由が奪った。娘が嫌いなわけではない。恨んでいるわけでもない。受け入れきれないのだ。私に似た、あの生命体の存在を。夫はあの生命体を愛している。自分が何かをした訳でないのに、よくもそこまで愛情を注げるものだと、不思議に思う。今私は人としてそこそこ幸せなはずだ。でも父の死から1年経っても私は、女として

の自分を捨てきれずにいる。自分一人の人生を欲している。女の寿命８７歳まで、まだ後５０年以上ある。

○父が死んだ　墓前

私の隣に四方司。

私　三雪は？
四方司　向こうのベンチでスマホいじってる。
私　そう。
四方司　おじいちゃんのお墓に興味はないみたい。
私　中学生なんて、そんなもんでしょ。
四方司　そうかな。俺はおじいちゃん子だったから。
私　四方司さんは、そういうの関係ないでしょ。
四方司　え？
私　四方司さんは思春期とか反抗期とか無縁の人でしょ？
四方司　そんなことないよ。
私　反抗期あった？
四方司　んー。そう言われてみると、なかったかもな。
私　ちゃんと子供の頃に反抗期を迎えなかった人は、大人になってから反抗期が来ちゃうんだってよ。
四方司　こんなおっさんの反抗期は嫌だな。
私　大反抗期あったじゃん。
四方司　おっと。またその話？
私　警察やめてラーメン屋やるなんて反抗期すぎるよ。
四方司　ママもいいって言ってくれたでしょ。
私　言ったけど。
四方司　けど？
私　ラーメンがこんなに美味しくないと思わなかったんだもん。
四方司　そんなこと言うなよ。日々努力してちょっとずつ美味しくなってるんだから。
私　私、美味しくないラーメンで太ったおばさんになるのは嫌。

四方司　美味しいラーメンで太ったおばさんになるのはいいの？
私　美味しいラーメンで太ったおばさんは優しい顔してそう。まずいラーメンで太ったおばさんは卑しい顔してそう。
四方司　太った理由で顔に違いなんて出るかなぁ。
私　外見は内面の一番外側って。
四方司　よくいうやつね。
私　三雪も太ったらいじめられちゃう。
四方司　太っただけでいじめられるかな。
私　いじめられちゃうよ。結構その辺シビアなんだから中学生って。
四方司　三雪は何を思ってるんだろうな。
私　どういうこと？
四方司　三雪の顔を見ても、何を考えてるのかさっぱりだ。
私　５０のおじさんが中学生の考えてることを理解する方が無理あるよ。
四方司　そう言われちゃうと、そうだよな、ってなっちゃうんだけど。
私　お父さんが、よく言ってたよ。「思いやりって言葉を作った人は傲慢だよね。」って。
四方司　実業家ならではの格言だね。
私　「人の気持ちなんてわかるわけがない。なぜなら私たちは自分の気持ちすらわからずに生きているんだから。」だってさ。
四方司　そうかもしれないけど。俺はやっぱり、分かり合う努力をやめたくないんだよなぁ～。

そこに春日が現れる。

春日　あの！　あ、氷雨ちゃん、だよね？
私　……。
春日　あ、すいません。人違い、でしたか？
私　……。え？
四方司　知り合い？
私　いや。
四方司　あなたは？
春日　あ、すいません。氷雨ちゃん。覚えてないかな。僕、春日。

私　え？　春日くん？
春日　うん。
私　え。本当に？
春日　あ、そうだよね。ちょっと、わかりづらかったかな。
私　あ。
春日　(顔を膨らませて)どう？
私　んー面影あるかも。
春日　中学まで、太ってたから、ね。
私　太ってたっていうか、
春日　デブだったもんね。完全に。
私　ああ、うん。
四方司　この人は？
私　小学校と中学校一緒だった春日くん。
春日　すいません。お父さん。僕、春日十夢と言います。氷雨ちゃんとは小学校からの付き合いでして。
四方司　あ、夫です。
春日　え？
四方司　夫の光石四方司と言います。
春日　光石。
四方司　婿入りでして。ほら、お父さんが有名な、ねえ。でしたので。
春日　あ、そうだったんですね。
四方司　ママ。久しぶりだし、積もる話もあるだろうから、俺は三雪のとこに行ってるよ。
私　あ、うん。

四方司、去る。

春日　なんか、ごめん。
私　いや、全然。びっくりした。春日くんすっかり変わっちゃってるから。
春日　高校でバスケ始めたらさ、一気に。
私　そうだったんだ。中学の時は化学部だったよね？
春日　あ、覚えててくれたんだ。うん。そう。化学部。氷雨ちゃんは、陸上

部だったよね？
私　うん。そうだね。化学部って何してたの？
春日　え、興味持ってくれて嬉しいな。
私　化学部って活動してる様子とかなかなか見ないから。
春日　そうだよね。化学部はさ、毎年みんなそれぞれテーマを決めて文化祭での発表に向けて研究をするんだよ。
私　春日くんは何の研究してたの？
春日　あ、えっとね、炎色反応って言って、あ、花火の原理なんだけど、炎の中に入れる金属によって、炎の色が変わるんだよね。それを研究してた。綺麗なんだよね。
私　花火。
春日　花火、綺麗だよね。
私　芥川龍之介の短編にね、「舞踏会」っていう本があって、そこで描かれる花火の情景がとっても綺麗なの。
春日　そうなんだ。氷雨ちゃんは本が好きだったもんね。
私　うん。そうなの。今は？
春日　え？
私　今は何をしてるの？
春日　あ、うん。今はね、学校の先生やってるんだ。
私　そうなの？　意外。
春日　そうかも、うん。自分でも意外で。
私　高校の先生？
春日　そう。化学を教えてるんだ。
私　すごいね。本当に化学が好きなんだ。
春日　氷雨ちゃんは？
私　氷雨ちゃん。
春日　え？
私　私、氷雨ちゃんって呼ばれてたっけ？
春日　え？　違ったっけな。
私　光石さんだったような気が。
春日　あ、ごめん。
私　いや、全然いいんだけど。

春日　直そうか。
私　大丈夫大丈夫。氷雨ちゃんなんて呼ばれるの、新鮮だったから。
春日　え？
私　だから、うん。全然、氷雨ちゃんで大丈夫。
春日　あ、そうか。うん。なら良かった。
私　春日くんは？　どうしてここに？
春日　あ、うん。大学時代にお世話になった教授のお墓がここにあって。ついでに。
私　お世話に。
春日　そう。教授が亡くなってなかったら、きっと研究を続けてたんだと思う。だから、僕の人生に大きく関わった人。
私　そうなんだ。私も、ここに私の人生に大きく関わった人が眠ってて。
春日　お父さん？
私　そう。後、お母さんも。
春日　お母さんも？
私　うん。１０年くらい前かな。まだ４０歳だった。
春日　若くして亡くなっちゃったんだね。
私　そう。事故だったからどうしようもないんだけどね。
春日　どうしようもなくても、さ。
私　なんかね、だからかわかんないけど、何の根拠もないんだけど、私も４０歳で死ぬのかなーなんて漠然と思ってるよ。
春日　そんな悲しいこと言わないでよ。
私　悲しい？
春日　悲しいよ。氷雨ちゃんが死んだら。
私　そっか。お父さんも死んじゃったし、私ももうおしまいかななんて思ってたけど。
春日　そんなことないよ。
私　ありがとう。
春日　そんなお礼を言われるほどのことじゃないよ。
私　お父さんが言ってたから、「感謝は常に伝えなさい。」って。
春日　そっか。
私　尊敬、してたからさ。

春日　有名だもんね。お父さん。

私、春日、去る。

○父が死んだ　ベンチ

四方司の座るベンチに丹下が立っている。

丹下　有名ですもんね。お義父さん。

四方司　まあ、そうですね。

丹下　どうでしたか？

四方司　どう、とは？

丹下　お隣、座ってもよろしいですか？

四方司　はあ。

座ろうとして、お尻に入っている二つ折財布を出すと、ぎっちり詰まったカードが飛び出す。

丹下　あああ、すいません。

四方司　あ、いえ。（カードを拾うのを手伝う。）

丹下　すいません。

四方司　（カードを丹下に渡す）結構行かれるんですか？

丹下　え？

四方司　あ、いや。女の子の名刺が。

丹下　あ、はは。お恥ずかしい。まあ、息抜きというか。（座る）

四方司　息抜き、ですか。

丹下　そんなところへでも行かないと、女性と話す機会もなかなか。

四方司　はあ。

丹下　入れ込んでいた女性がいたんですがね、ある時から指名しても指名しても席についてくれなくなってしまいまして。

四方司　嫌われてしまったんですか？

丹下　いえ、私よりもっと入れ込んでいた方がいて、その方がやれシャンパ

ンだ、やれドンペリだとやるもんですから、私につく暇がなかったんでしょうね。
四方司　それは残念でしたね。
丹下　まあ、それで私はそのお店に行くのを辞めちゃったんですが。
四方司　その方が賢明でしょう。
丹下　でね、私からお気に入りを奪った男性。誰だったと思います？
四方司　わかるわけないじゃないですか。
丹下　光石五郎さんですよ。
四方司　え？
丹下　目深にハットをかぶっていましたが、間違いありません。あれは確かに光石五郎さんでした。
四方司　意外ですね。お義父さんはそういうお店に行くイメージはあまりなかったもので。
丹下　で、どうでしたか？　四方司さんから見て、光石五郎という人物は、どんな人物でしたか？
四方司　どんな人物。んー、とても真面目な商売人という感じでした。と言っても、私がお義父さんとしっかりお会いしたのは、一度だけでしたので、その時のイメージですが。
丹下　奥様はいかがでしょう？
四方司　はあ。
丹下　奥様は、どう思っていたのでしょう、光石五郎さんのことを。
四方司　そうですね、尊敬、していたと思います。今も時折、お義父さんの言葉を思い出したように、引用して語ることがありまして。
丹下　なるほどなるほど。
四方司　それが出版社の方に何の関係が？
丹下　弊社に一通の手紙が届いたんですよ。
四方司　手紙。
丹下　光石五郎さんの本を出版してほしいと。
四方司　お義父さんの本を？
丹下　差出人が不明なので、無視しようかとも思ったんですが、そこに書かれていた内容がなかなか衝撃的だったもので。少し調べてみようかという話になったんです。

四方司　衝撃的？
丹下　はい。「光石五郎は女を抱くためだけに金を稼いだ。」「光石五郎は３００人の美女に総額３０億円を貢いだ」と。
四方司　本当ですか？
丹下　本当かどうかは、これからです。光石五郎が世間の言うように、好々爺、男性版聖母マリアとでも言うべき人物なのか、それともこの手紙が差すように、善意にあふれた老人の仮面を被った狸爺なのか。
蝶羽　その話、私にも聞かせてもらっていい？

蝶羽が入ってくる。

丹下　どうして、ここに。
蝶羽　お久しぶり、丹下さん。
丹下　蝶羽さん。
蝶羽　私、全然信仰とかないし、死後の世界とか信じてないけど、たまにはお墓参りに来てみるもんね。
四方司　あの、こちら方は？
丹下　先ほどお話ししたお店の。
蝶羽　初めまして。私、五郎さんの愛人をやってた猪鹿野蝶羽と言います。

暗転。

○母が死んだ　モノローグ

私の独白。

私　母が死んだ。ホテルの窓から飛び降りて死んだ。当時私は２１歳。私もようやく大人になったかなー、なんて思った時だった。「世代交代。」そんな言葉が頭に浮かんだ。これからは私の時代になるのだ。そんな予感。母の遺書はとても単純なものだった。たった一言。「もう疲れた。」母に愛されていたという実感はない。母としっかり会話をしたのも遠い昔のことのように感じる。中学に入ってから、必要最低限の会話以外しなくなったからだ。母

も私も本を読むのが好きだった。小学校時代は2人で共通の本を読んでいた。でも中学に入ってからは、同じ本でもそれぞれ買うようになった。母の手垢がついた本を読みたくなかった。本棚も別々になった。最初のうちは、母の感想が気になることもあったけど、そんな気持ちも次第に薄れていった。何一つ不自由なく育ててくれたことには感謝をしている。でもやはり母は既に「終わった」人だったんだと思う。私を産んだ瞬間に、あのひとの人生は「終わった。」申し訳ないと思うこともなくはないけど、私が選んで生まれてきたわけでもないし、この結末は至極当然のようにも感じる。毎月、お墓参りには行くことに決めた。この人みたいにならないようにしよう。そう自分に言い聞かせるための日。そう決めたから。

○母が死んだ　墓前

私の隣に四方司。種本が入ってくる。

種本　せ～んぱい！　み・つ・い・し先輩。
四方司　種本。
種本　いやあ～、びっくりしましたよ。まさか光石先輩絡みの事件を担当をすることになるとは。
四方司　事件？
種本　自殺、じゃないかもって話です。
四方司　殺されたと？
種本　光石先輩がやったんじゃないですか？
四方司　……お前の軽口に、いちいち激昂するのも飽きた。
種本　そんな寂しいこと言わないでくださいよ。警察辞めても、光石先輩は光石先輩じゃないですか？
四方司　俺の婿入りがそんなにおかしいか？
種本　はい？
四方司　これ見よがしに光石・光石と呼びやがって。
種本　光石先輩に光石先輩って呼んで何が悪いんですか？
四方司　聴取がしたいなら、後で受ける。ここはよしてくれ。墓の前だ。
種本　先輩が教えてくれたんですよ～。「取調室は人の本音を聞くところじゃ

ない。」って。だから本音は外で聞こうと思いまして。
四方司　警視正にもなって、どうして現場に出てきてる？
種本　冷たいなー。久々に四方司さんに会いに来たんじゃないですか。
四方司　釘を刺しにきたのか？　余計なことはするな、と。
種本　まあ、そんなところです。いいですか？　この事件は僕の管轄内。光石先輩は、一般市民なんですから、大人しくしておいてください。
四方司　……わかった。わかったから帰れ。空気が悪くなる。
種本　こっわいな～。奥さんにもそんな怖い剣幕で怒鳴るんですか？
四方司　誰がそんなことするもんか。
種本　じゃあ、今日のところはお暇します。でも一個だけ。一個だけ聞かせてください。
四方司　なんだ？
種本　自殺に見せかけて殺された、とすると、もしかしてあなたのお義父さん、光石五郎の秘密に関係してしまった、なんてことないですかね？　何か知りません？　先輩。
四方司　知らないな。
種本　ご存知の通り光石五郎は県警の上層部とも非常に良好な関係をお築きの方だ。そんなところに四方司さんが、ねえ。びっくりですよ。何で警察辞めたんですか？
四方司　一個だけ、の約束だろ？
種本　おー怖い。じゃあ、また、近いうちに会いましょう。

種本、去る。

四方司　ごめん。驚かせてしまったね。
私　驚いた。普段と全然違うから。昔はそんな感じだったんだね。
四方司　特にあいつの前だと、な。
私　キャリア組ってやつ？
四方司　それは関係ない。１０個以上離れていても生理的に受け付けない、心が許容できない人種というのは、いるもんだと、俺が初めて思ったのがあいつだ。
私　珍しい。

四方司　まあだから、自分にこんな感情があったんだと気づかせてくれたという意味では、感謝はしてるかな。
私　ポジティブだね。
四方司　人間、長く生きているとだんだん楽観的になるもんだ。
私　ふーん。じゃ、２１歳はまだまだか。
四方司　ああ。まだまだ、だ。
私　お母さんは楽観的になる前に死んじゃったのかな。
四方司　そうかもな。……ちょっと飲み物買ってくる。
私　え？
四方司　種本のせいで喉が渇いた。一緒に来る？
私　いい。ここで待ってる。
四方司　何か買って来ようか？
私　大丈夫。
四方司　わかった。

四方司、去る。そこに風音がやってくる。

風音　あなたは「野菊のような人だ」
私　「私野菊の様だってどうしてですか」
風音　「さアどうしてということはないけど、民さんは何がなし野菊の様な風だからさ」
私　「それで政夫さんは野菊が好きだって……」
風音　「僕大好きさ」
私　……野菊なんて咲いてないけど？
風音　お墓はあるでしょ？
私　「野菊の墓」好きなの？
風音　好きじゃないよ。普通。でもあなたのことを「野菊のような人」って思ったのは本当だよ。
私　そう。
風音　お母さんにそっくりだね。
私　そう？　顔はそっくりって言われて育ったけど？
風音　顔も性格も似てる。

私　性格は似てないと思うけどなー。
風音　似てるよ。
私　お母さんのこと知ってるの？
風音　知ってるよ。
私　そうなんだ。
風音　ねえ。
私　なに？
風音　四方司さんが、殺したの？
私　え？
風音　さっきの人、言ってたでしょ？　自殺じゃないって。四方司さんが、殺したの？
私　そんな訳ないでしょ。
風音　じゃあ誰が殺したの？　あなた？
私　なんでそうなるの？
風音　私、知りたいの。自殺にしろ、殺人にしろ、どうしてあの人が死んだのか。あなたは知りたくないの？
私　そんなに。
風音　どうして？
私　知って何かが変わる訳じゃないし。
風音　もし四方司さんが殺してても？
私　……例えば、の話だけど。そうだとしても、私はそんなに変わらないと思うよ。
風音　変わらないようにしてるんだね。
私　え？
風音　他人の影響で自分が変わっちゃうのが怖いんだね。
私　どうだろうね。
風音　私はね、他人の影響で自分がいっぱい変わっちゃったから、よくわかるよ。その感覚。
私　お母さんと何かあったの？
風音　知りたい？
私　……知りたい、かも。

【音響：ＢＧＭ　ＥＮＤ】

風音　あなたのお母さんにはあなたに言ってない秘密があるの。

私　秘密。

私、風音、去る。

○母が死んだ　ベンチ

四方司の座るベンチに朱美が立っている。

朱美　先輩が私に言ってない秘密ってなんですか？

四方司　なんだ唐突に。

朱美　種本のやつが私に言ってきたんです。お前は四方司さんに信頼されてなかったって。だってお前は四方司さんの秘密を聞いてないだろうって。

四方司　またあいつは余計なことを。

朱美　今私は種本の下なんです。先輩のせいです。

四方司　俺のせいか。

朱美　そうですよ！　先輩が辞めるからこうなっちゃったんです。捜査の才能はあってもラーメン屋の才能なんてないんですから早く戻って来ればいいのに。

四方司　ラーメンの才能が開花するのはこれからだ。

朱美　あれが進化したとしても、鳥の餌が犬の餌になるようなもんです。

四方司　言い過ぎじゃないか。

朱美　実体験です。

四方司　そういえば食べにきてくれてたな。

朱美　当たり前じゃないですか。先輩がケバブ屋でもパンケーキ屋でもタピオカ屋でもからあげ屋でも食べに行きますよ。

四方司　俺はラーメンがいいんだ。

朱美　捜査、するんですか？　一人で。

四方司　え？

朱美　種本が釘を刺しにきたってことは、先輩が何かしようとしてるのを察

知したってことですよね？
四方司　あいつは妙に情報通だからなー。
朱美　感心してる場合じゃないですよ！　あいつが手を回したら、先輩に情報なんて入ってきませんよ？
四方司　だよなー。
朱美　私、協力します。
四方司　ダメだよ。
朱美　どうしてですか？
四方司　朱美さんの上司は今、種本でしょ。勝手やったらダメだよ。
朱美　私がいいって言ってるんですよ？
四方司　気持ちはありがたいけどね。厄介ごとに巻き込みたくないし。
朱美　私がこのまま種本派で上に行けると思いますか？
四方司　え？
朱美　今の状況、種本の寝首を掻かなきゃ上には上がっていけないと思います。
四方司　でもねえ。
朱美　じゃあこうしましょう。先輩が私に協力してください。
四方司　ええ。
朱美　それならいいですよね。私は個人の意志で種本を潰すために、今回の件に関わります。
四方司　いや、それは。
朱美　ダメとかいう権利ないですから。これは。
四方司　あのね、そういう問題じゃ。
朱美　秘密だって、どうせ話してくれないんですから。私が自分で掴みます。
四方司　どうしてそうせっかちなの。
朱美　操作はスピードが命って先輩から教わりましたから！
四方司　それはそうなんだけどね。
朱美　煮え切らないので、一個本当は一般の人に教えちゃいけないマル秘情報を先輩に教えてあげましょう。
四方司　マル秘情報？
朱美　種本ですが、あの日、あのホテルにいたらしいですよ？
四方司　ホテルに？

朱美　それが何を意味するかわかりますよね？　この事件に県警の闇が関わっている可能性が限りなく高くなったってことです。

○オープニング

全員出てくる。

私　父が死んだ。
全員　父が死んだ。
私　私が３０歳の時、父が死んだ。
全員　３０歳の時、父が死んだ。
私　父の名前は光石五郎。
全員　光石五郎。
丹下　光石五郎が死んで一年。剛談社に一通の手紙が届く。
四方司　光石五郎は表向きは地元で有名な資産家で好々爺。
全員　表向きは地元で有名な資産家で好々爺。
丹下　しかし彼には裏の顔があった。「光石五郎は女を抱くためだけに金を稼いだ。」
全員　「光石五郎は女を抱くためだけに金を稼いだ。」
丹下　「光石五郎は３００人の美女に総額３０億円を貢いだ」
全員　「光石五郎は３００人の美女に総額３０億円を貢いだ」
丹下　その噂の真実を探るため、僕は光石家に接触を試みる。そこに現れたのは、光石五郎の愛人。
全員　光石五郎の愛人。
丹下　愛人はまさかの僕の知り合い。昔入れ込んでいたキャバ嬢だった。
私　私は父の噂の真相を確かめるために編集者の話を聞くことにした。
丹下　あなたのおっしゃってる光石五郎像はだいぶ今回の噂とかけ離れているようですねー！
私　でも丹下さんのおっしゃっている噂には根拠がないじゃないですか。
丹下　根拠はこの手紙です。
私　嫌がらせかもしれません。
丹下　それをまさに今調べているのですよ。

私　ねえ短。私、どこまでお父さんのこと話すのがいいのかな？
短　って待って待って待って。急に色々言われてもわかんない。ちょっと待って。なに？　私は何を相談されてるの？
私　私の思い出の中のお父さんは、ずっと優しかったし、ずっとすごい人だった。今更そんな裏の顔の話とか言われても困るし、知る必要もないんじゃないかなとも思うの。でも真実を知りたいって気持ちもあるの。
短　そうだよね。思い出は綺麗なままが良いよねとも思うけど、剛談社に手紙が来てるんだよね？　それって噂が本当だったら本が出版されちゃうってことじゃない？
私　だから私の悩みごとっていうのはまさにそれで、お父さんの噂が本当とか嘘とかそんなのはどうでもよくて、それが世に広まっちゃうのは問題だと思うわけで、それが本当でも嘘でも。
短　で？　どうしたの？
私　結局一番知ってそうなのはその愛人ってことだから、その愛人の話を聞くことになったの。
蝶羽　私が知ってる五郎さんは、いつでも優しくて、気前が良くて、金払いが良くて、いつも応援してくれて。
丹下　あーーー話にならない！　欲しい情報が手に入らない！
蝶羽　じゃあどんな情報が欲しいの？
丹下　もっとこう。パワハラとかモラハラとかセクハラとか、性的搾取とか、僕が聞きたいのはそういう話なんです！
蝶羽　えー、いい人だったんだもん。
丹下　どう思いますか？　氷雨さん。
私　わからない。愛人っていうかお店の人？　春日くんどう思う？
春日　んーって僕全然関係なくない？　成り行きで来ちゃったよ！
私　こういう時って第三者の意見が必要だっていうでしょ？　だから春日くんにも来てもらったの。
春日　役に立つかな。僕、ステータス元デブってことだけだけど。
全員　元デブ！
私　短はどうかな？
短　なるほどね、それはわかった。それはわかったけど、それでなんで私まで呼び出されなきゃいけないの？

私　私が言えないことを代弁して欲しくって。
短　ちょっと待ってちょっと待って。そりゃキツイって部外者すぎるもん私。
私　そこを何とか！
短　わかったけど、部外者が行っていいのかな。
丹下　と思うじゃないですか？
全員　え？
丹下　この手紙によるとどうやら、この柵田短という女性は、光石五郎と何かしらの関係があったみたいなんですよ。でも僕はこのことをあえて伏せておきました。
全員　しーっ。
丹下　柵田短をあえて泳がすことによって何か分かるかもしれない、そう思ったんです！
全員　あえて泳がす！
短　光石五郎について私が知ってて氷雨が知らないことがある。いや、氷雨は知らないのか忘れているのか。
全員　知らないのか忘れているのか。
私　母が死んだ。
全員　母が死んだ。
私　私が２１歳の時、母が死んだ。
全員　２１歳の時、母が死んだ。
私　母にはどうやら秘密があるらしい。
全員　秘密があるらしい。
私　その秘密を知るという謎の女。
全員　謎の女。
朱美　死因はどうやら自殺ではないらしい。
全員　殺人事件？
朱美　警察を辞めた先輩は独自に調査をするらしいけど、一人じゃ絶対真実にたどり着けない。私が先輩のために動くんだ。
四方司　俺自身迷っていた。後輩の協力なしでは警察を辞めた俺は何もできない。かと言ってもしこの事件に、俺が警察を辞めた理由が関わっているとしたら、後輩を巻き込むわけにはいかない。

朱美　とか考えてそうなので言ってやった。私が先輩に協力するんじゃなくて先輩が私に協力しろって。

種本　あーうっとおしい。いうこと聞かない後輩に。辞めても目障りな先輩。あんまり大ごとにはしたくないんだけどなー。まあ全ては先輩次第？

拓見　光石は気丈に振る舞ってたけど、こんなことに巻き込まれて平気なはずがない。俺が協力するんだって思ったけど、ただの大学生にできることなんてほとんどなくて、無力さを痛感する。しまいには

私　話を聞いてくれるだけで嬉しいよ。ありがとう。

拓見　とか言われてしまった。もうダメだろこれ。一番言われちゃダメなやつこれ。戦力外通告と一緒だよこれ。

全員　戦力外通告！

私　って感じで、捨てられた子犬みたいな顔してたから、一個だけお願いしてみた。「風音について調べて欲しい」って。

拓見　そんなこと言われたらやるしかないじゃないか。役に立つとこ見せたいじゃないか。役に立つぞって見せたくなってしまった。

風音　なぜあなたはあなたなの？

私　夢で風音に問いかけられた言葉がずっと頭の中で反芻される。

全員　なぜあなたはあなたなの？　なぜあなたはあなたなの？　なぜあなたはあなたなの？　なぜあなたはあなたなの？

私　私がなんで私かなんて知る必要があるのかもわからないけど、私がいる理由は絶対に両親なのは生物学的に確信を持ってそう答えられるわけで、それにしては私は両親のことをよく知らないんだななんて改めて考えてみて思ったわけで、結局私が知ってるのは「父親」「母親」という役割を持った、「仮面」を被った側面だけで、そうじゃない両親がどんな感じだったのか、なんて考えもしなかったわけで。せっかくの機会だからとか、私は私でちゃんと考えたい想いとかがあったから、逃げずに向き合ってみようかなって、いや、そんなかっこいいもんでもないんだけど、知ってみても良いかなって思ったわけで、

全員　寄せては返す波のように！　寂しく行き交う過去と現在！　百花繚乱人間模様！　そんなわけで父の死と母の死の真相は私に託された。

暗転。

○父が死んだ　墓前

丹下と蝶羽。

蝶羽　あれで良かったの？
丹下　あ、はい。助かりました。ありがとうございます。

丹下、蝶羽にお金を渡そうとして落とす。

蝶羽　(お金を拾いながら)相変わらず、鈍臭い。
丹下　はは、すいません。相変わらずで。
蝶羽　(お金を数える)1、2、3、4、5。確かに。
丹下　蝶羽さんは、変わりましたね。
蝶羽　何が？
丹下　昔だったら、こんな依頼受けなかった。
蝶羽　……今の私と昔の私じゃ、この5万の価値が違うの。
丹下　そうですか。
蝶羽　あーあ。本当にこの人の愛人だったらな～。
丹下　はは。
蝶羽　何笑ってんの？
丹下　蝶羽さんの中では、僕の恋人となる未来はあり得なかったんですね。
蝶羽　(丹下を睨みつけて)今も昔も、丹下さんは気持ち悪いからイヤ。
丹下　随分、直接的な悪口ですね。
蝶羽　アブラムシ、アザミウマ、カイガラムシ。
丹下　なんですか？
蝶羽　花につく害虫みたいだなって思って。
丹下　鼻につくこと言いますね。
蝶羽　五郎さん、真摯で良い人だったよ。
丹下　へえ。
蝶羽　うちのお店使ってたのも、お仕事で接待のためだけだったのに。私がスナックに移動するって時も、わざわざ一回だけだけど、顔だしてくれて。
丹下　お金は？

蝶羽　え？
丹下　お金はもらわなかったんですか？
蝶羽　お店でお金は使ってくれたけど、直接はもらってないなぁ。
丹下　じゃあさすがに３０億は無理ですねー。
蝶羽　丹下さんは本当だと思うの？　その手紙。
丹下　氷雨さんの友人だという柵田短さん、彼女の名前がこの手紙の中にありました。
蝶羽　え？
丹下　この手紙には、「光石五郎が柵田短とホテルに入っていくのを見た。」「愛人の一人は柵田短かもしれない。」とあります。
蝶羽　あの子が？
丹下　はい。
蝶羽　五郎さんは随分気の強い女の子が好きなのね。
丹下　はは。大変でしたもんね。「勝手に氷雨のお父さんの本なんて出版させないから！」って。
蝶羽　友達のためによくそこまでできるなって思ってたけど、愛人だったなら納得かなー。
丹下　手紙を信じるなら、ですけどね。もう少し泳がせます。尻尾を出すのを待つんです。
蝶羽　プラス２万で、動いてあげようか？
丹下　はい？
蝶羽　今の私には、「光石五郎の愛人」という肩書きがあるでしょ？　接触しやすいじゃない？　前金で２万円。得られた情報によっては後払いで５万円から１０万円。どう？
丹下　……私は悲しいですよ。
蝶羽　何が？
丹下　昔のあなたはもっと誇り高い女性だった。凛と咲く一輪の花のように。
（２万円を出しながら）
蝶羽　（２万円を受け取りながら）害虫がつくと花も女も枯れちゃうの。
丹下　害虫ってのは私のことですか？
蝶羽　さあ。

蝶羽、丹下、去る。

○父が死んだ　ベンチ

私、春日、短。

短　いや誰だよ！　本当に。
春日　いや、だから春日十夢だってば。
短　いや信じらんない。いやあのデブが？
私　失礼だよ。
春日　柵田さんは変わってないね。
短　え？　何が？
春日　ほら、中学のはじめのホームルームでさ、なんか男子たちの雑談が止まんなくて、先生もまだ若かったからうまく対処できてなくてさ、そしたら柵田さんが、「先生！　時間の無駄なんで私帰ります。」って。入学してすぐそんなことできちゃうのすごいなーって、僕思ったの覚えてるよ。
短　帰ったわ。私確かに帰ったわ。
私　うん。帰ってた気がする。私もびっくりしたから覚えてる。短が帰ったら教室がシーンとしちゃってね。
春日　そう。それで結局ホームルームがまとまって。
短　そんな思い出話が出てくるってことは本当に春日なんだ。
春日　だからそうだって。
短　なるほどねー。せっかくかっこよくなった姿で氷雨にアプローチしようとしたんだけど、氷雨にはもう夫も子供もいましたってオチか。残念だったね春日。
私　アプローチって。たまたま会っただけだよ。
春日　そうだよ。まあ結婚して大きい子供までいたのはびっくりしたけど。
短　私らの周りだと一番早いんじゃない？　１８で結婚なんて、ねぇ。
春日　そう思う。
短　私は中学卒業してからも会って話聞いてたから、アレだけど。中学時代の人たちは絶対びっくりするね。氷雨、人が変わったように何かを急に決めちゃう時があるから。

春日　そうなんだ。
短　どうしてって聞いても、あんま覚えてないって言うしさ。最初はびっくりしたんだけど、思い切って何かをする時って意外と覚えてないもんかな、とか思ってね。
私　びっくりさせてごめん。
春日　氷雨ちゃん成人式も来なかったしね。
私　子育てで忙しくて。
短　あれ待って。てことは春日って成人式来てたの？
春日　いたよ。
短　どこにいた？
春日　化学部のメンバーと一緒に。
短　あーだからか、私あんまりそっちの方行ってなかったな。
春日　柵田さん、だいぶ酔ってたし。
短　そうだっけ？

そこに蝶羽が現れる。会釈する３人。
蝶羽、会釈して通り過ぎようとして戻ってくる。

蝶羽　ねえ、五郎さんってどんな人だった？
私　え？
蝶羽　私の知ってる五郎さんと娘さんから見た五郎さんは違うのかなって。
私　どうなんでしょう。ずっと一緒にいたから、そういうもんかって思ってたんですけど。
蝶羽　うん。
私　すごいちゃんとしたというか、仕事忙しいはずなのに、家事とかもしっかり手伝ってて。小さい頃の記憶も、公園とかでよく一緒に遊んでもらったりしてたなって。
蝶羽　へえ。
私　私、今ウェブライターみたいなことしてるんですけど、物を書くのが好きになったのも父の影響というか。
蝶羽　どうして？
私　父の書斎があって、そこにたくさん本があったんで、本を読むのが好

きになったんです。ある日、父が「氷雨も書いてみるか」って言って、日記帳をプレゼントしてくれたんですけど、それからその日に読んだ本の感想とか、そこに書くようになって。

蝶羽　本が好きって言うのは初めて聞いたなー。

私　あ、そうなんですね。

蝶羽　案外、自分で出版社に手紙書いてたりしてね。

短　そんなことあり得ますかね？

蝶羽　もしそうだとしたら、あなたも止める理由がないでしょ？

短　止める理由を決めるのは私じゃなくて氷雨なんで。

私　父は、その、どうして蝶羽さんと？

蝶羽　どうしてなんだろうね、私もわかんない。似てたりする？　私？　あなたのお母さんと。

私　わからないですけど、多分、似てないと思います。

蝶羽　そっか。

短　遺産目当てですか？

蝶羽　何急に？

短　いきなり愛人だって名乗り出て、引っ掻き回して。迷惑だとか思わないんですか？

蝶羽　迷惑だったならごめんね。

短　謝るんですか？

蝶羽　意外だった？　でも、お金なんてどうでもいいの。どうでもいいって言ったら嘘にはなっちゃうけど。本当に知りたいのは私の価値。

短　価値？

蝶羽　私って価値があるのかなって、思うことない？

短　どうでしょう。

蝶羽　高校生の時さ、自分で自分の下着姿を写真に撮ってね、もちろん顔は隠したけど、ネットに上げて。そしたらさ、すごい反応あるのね、群がってくるの。わかるかなー、あの感じ。自分だってバレたらやばいでしょ？　その怖さはあるんだけどさ、でも、なんかホッとしたんだよね。自分には価値があるんだって。

短　歪んだ承認欲求ですね。

蝶羽　そうかもね、自分でも歪んでるって思う。でも五郎さんはさ、確かに

あの時、私に価値をくれてたんだよ。言ってくれたんだよ。「蝶羽さんがいると商談がうまく進む。」って。「これからもよろしく。」って。

私　あの、私も。

蝶羽　え？

私　いや、なんでもないです。

短　金目当てじゃないなら、なおさらそっとしていてくださいよ。氷雨の平穏を崩さないで。

春日　あの、ちょっといいですか？

蝶羽　なに？

春日　光石五郎さんについて思い出したことがあって。光石五郎さんって化学とか興味あるんですかね？

蝶羽　化学？

春日　いや、あの、そう言えば何回か、教授に会いに来てたことがあったなって。

私　お世話になったって言う？

春日　うん。僕は直接会ってないんだけど、教授がそんな話してて。昔よく来てたって。何か研究してたのかな～って。

蝶羽　うーん。わかんないな。

短　大学の研究室で何かしてたってこと？　出資してたとか？

春日　わかんないけど。

そこに四方司が現れる。

四方司　ママ、ちょっといいかな。

私　どうしたの？

四方司　三雪がちょっと。

私　ちょっと？

四方司　ちょっと。

私　なに？　はっきり言ってよ！

四方司　いや。

私　今大切な話してるの。

四方司　いや、ここだと。

私　なに？
四方司　こっち来て。
私　いや。
四方司　三雪の話だよ。
私　ここで言って。
四方司　(ため息をついて)三雪が万引きで捕まったって。
私　え？

５人、去る。

○母が死んだ　墓前

種本と朱美。

種本　光石五郎って男はさ、戦場の兵士みたいな男だったんだよ。
朱美　戦場の兵士？
種本　菅原はさ、もしそこに凶悪犯がいたとして、発砲許可が降りたら躊躇わずにその凶悪犯の命を奪えるかな？
朱美　動きを止めるのに銃を使用しても命を奪うことはしないかと思いますが。
種本　命を奪うしか方法がないとしたら？
朱美　それは、撃つでしょうね。
種本　躊躇せず？
朱美　躊躇は、してしまうでしょうね。
種本　躊躇するのは正しいことだよ。人間として当たり前のことだ。だけど戦場の兵士はそれでは生き残れない。相手を倒せない。
朱美　そうかもしれませんね。
種本　一説によると、米兵の発砲率は、第二次大戦で１５％。朝鮮戦争では５５％。ベトナム戦争では９５％にまで上昇したと言われているらしい。
朱美　そんなに上がったんですか？
種本　目的のために人を人として見ないようにする訓練によってこれはなし得たとか。

朱美　人を人として見ない。
種本　殺人マシーンってことだね。しかし無意識の中でフラストレーションは溜まっていく。だからそのはけ口として、己の欲の満たすためだけに、残虐な行為ができてしまう。人を人として見ないから。
朱美　光石五郎がそんな男だったということですか？
種本　そう。あの男が表面的に紳士的だったのも、分け隔てなく人を愛して見えたのも、目的のために人を人として見ていなかったからさ。そのフラストレーションが爆発する場所はどこだったんだろうねー。
朱美　見たことがあるんですか？　その瞬間を？
種本　あるよ。四方司先輩は、ね。
朱美　え。
種本　確かに俺はあの日、あのホテルにいた。だけど、今回の自殺とは無関係だ。
朱美　私にも釘を刺しに来たんですか？
種本　違う。わかってないなー。菅原は俺を悪魔かなんかだと勘違いしてない？
朱美　いえ、そのようなことは。
種本　でも少なくとも悪人には見えてるよね？　四方司さんが正義で、俺が悪で。
朱美　ご自覚がおありで。
種本　でもね。世の中、そんな白黒ハッキリしてないのよー。俺は仮にも菅原の上司でしょ？　心配してるんだよ。菅原まで辞めることになっちゃわないかってさー。
朱美　先輩は光石五郎に関わったから、警察を辞めたってことですか？
種本　とっても簡単にいうとそういう事だね。

種本、朱美、去る。

○母が死んだ　5　下校中

私、風音。拓見、2人の様子を覗く。

風音　また会ったね。
私　待ち伏せしてるんでしょ？
風音　違うよ。私の世界にはあなたしかいないだけ。
私　え？
風音　だから、この世界で私はあなた以外の人間に出会わない。
私　何それ？
風音　何でしょう？
私　それもお母さんの秘密と何か関係があるの？
風音　そうかもね。
私　どうして、教えてくれないの？
風音　お母さんの秘密？
私　なんで隠すの？　風音が言い始めたことなのに。
風音　まだ、準備が整ってないんだよ。
私　準備？　なんの準備？
風音　秘密。
私　秘密が多いな。
風音　秘密は知るタイミングが大事なんだよ。
私　「醜いアヒルの子。」知ってる？
風音　もちろん。
私　「醜いアヒルの子」はどうして不幸だった？
風音　本当は白鳥の子なのに、アヒルの群れの中に入っちゃったから？
私　そう。お話の最後、醜いアヒルの子は、自分が白鳥だってことに気づいて幸せになるんだけど。私はそうは思わない。
風音　なんで？
私　ずっとアヒルとして暮らしてたんだよ？　白鳥の群れの中に入ったって上手くやっていけるはずがない。
風音　オオカミに育てられた少女みたいなもんか。
私　そうだよ。オオカミに育てられた少女は人間世界になじむことはできないんだよ。
風音　じゃあどうすれば、アヒルは、オオカミに育てられた少女は救われるのでしょうか？
私　仲間を見つけることじゃない？

風音　仲間？
私　アヒルに育てられた白鳥を見つけるの。自分と同じ境遇の仲間を見つける。そうすると救われる。
風音　そうかな？
私　少なくとも、私は多少救われてるよ。
風音　……違うね。
私　え？
風音　アヒルに育てられた白鳥なんて、オオカミに育てられた少女なんて、そうそういるものじゃない。結局白鳥の世界に、人間の世界に慣れていくしかないんだよ。
私　慣れていく？
風音　前、就活の話したでしょ？　東京出るかどうか迷ってるって。
私　したね。
風音　こんな田舎ぐらしの人間が、東京でやってけるのかって思うって言ってたけど、案外、流れの中に入っちゃえば、自然と慣れるんじゃない？　東京なんてそんな人ばっかりだって話だし。
私　それでいいって、素直に思えないな。
風音　幸せに生きるコツはね、「自分は違う」と思わないことだよ。
私　思ってないよ。
風音　どうかなあ？　今あなたの足はそこにあって、ここに立ってる。それ以外のあなたはいない。それはどこにいたってそう。
私　自分に対して、何も思うことはないよ。
風音　なぜあなたはあなたなの？
私　好きだね、それ。
風音　あなたなりの答えが、聞きたいからね。

私、風音、去る。朱美、拓見の後ろから声を掛ける。

朱美　何してるの君。
拓見　あ、え！　これは。
朱美　ちょっとお話聞かせてもらっていいかな？
拓見　いや、本当に、違うんで、あの、僕はこれで。

拓見、逃げるように去る。種本が現れる。

朱美　どうしてここに？

種本、朱美のポケットからスマホを出す。

種本　ごめんごめん。俺のスマホが間違って菅原のポケットに入っちゃってたんだ。

朱美　そんなことあるわけないですよね！

種本　光石五郎の近辺を嗅ぎまわるのはもうやめなさい。菅原はわかってない。人一人にできることは限られている。

朱美　それでも、私は県警の良心でいたいと思っていますから。

種本　(笑って)県警の良心？

朱美　絶対にあなたの闇も暴きます！

種本　傲慢だねぇ。

朱美　傲慢？　傲慢なのは種本さんの方じゃないですか！

種本　「県警の良心」。正義の代表。馬鹿馬鹿しい。いい？　何度も言わせないで欲しいな。正義なんてないの。あるのは人間一人一人の意志、それだけ。四方司先輩も正義の代表なんかじゃない。あの人はあの人の意志で動いてるだけだ。そして俺も俺の意志で動いてるだけ。四方司先輩のためになりたいなら、もっと四方司先輩のことを理解すること、そしてもっと自分を知ることだね。

朱美　自分を知る？

種本　はっきり言ってあげるよ。菅原はただ、四方司先輩に認められたいだけだ。そろそろ、答えのない世界に慣れろ。学校の先生に認めてもらいたいガキから卒業するんだな。

朱美　わかったように私のこと喋らないでもらえますか？

種本　その通り。わかったように喋ってるだけだ。真の意味で人と人は理解し得ない。だから菅原のことがわかるのも菅原だけだ。

朱美　失礼します！

種本　菅原！

朱美　なんですか？

種本　今日から菅原に担当してもらいたい事件がある。
朱美　え？
種本　しばらく北海道に行ってもらおう。
朱美　北海道？　なんの権限があって。
種本　慣れろよ。菅原。北海道が嫌なら、しばらくは俺と一緒に行動してもらう。いいね？
朱美　……卑怯です。
種本　勝つために必要なのは、正義じゃない。有無を言わせない権力だよ。

種本、朱美、去る。

○母が死んだ　ベンチ

私と拓見。

拓見　秘密ってなんだったの？
私　まだ聞けてない。準備がいるからって。
拓見　準備？
私　うん。そっちは？　何かわかった？　風音のこと。
拓見　まず基本的なところからいくと、名前を検索にかけてみたんだ。小野風音。まあＳＮＳ系はやってなさそうだった。
私　やらなそうだね。
拓見　でも小野風音ってまあまあ珍しい名前でしょ？
私　そうだね。
拓見　ほら、自分の名前とかで検索してみるとさ、よく平成なになに年生まれの名前一覧、みたいなのが出てくるんだけど。
私　そうなんだ。拓見ってエゴサとかするの？
拓見　え？　まあ、え。いいじゃんその話は。
私　まあ、いいけど。
拓見　そこに小野風音って名前があったから、名前と年齢、２４歳だっけ？は嘘ついてないんじゃないかなって思う。
私　そっか。

拓見　でもそれだけだと役に立ててる感じもしなかったから、探偵でも雇って調べようかなとか思ったんだけど、ちょっとお金的に頼めなくて。
私　いいよそこまでしなくても。
拓見　いや、役に立ちたいじゃんやっぱり。光石のさ。だから、俺、尾行したんだ。
私　え？
拓見　光石の前に小野風音は現れるだろ？　だから光石をつけてれば、小野風音を見つけられるって思って。
私　え？　ちょっと待って。私のこともつけてたの？
拓見　いや、あれだよ？　大学の帰り道とか、そういうのだけだよ。
私　……言ってよ。
拓見　え？
私　怖いでしょ普通に、そんなの。
拓見　ごめん。
私　私には別に尾行してるのバレてもいいんだからさ。
拓見　でも、それだと現れないかもしれないし。
私　で？
拓見　その日、小野風音が現れて、いつもみたいに少し光石と喋った後、2人は別れて、そこから俺、小野風音のことを追いかけたんだ。住んでる家くらいはわかるかなって。
私　普通にストーカーだよね。
拓見　え？
私　訴えられたら、負けるよ？
拓見　え？　いや、だって、俺。
私　ありがとう。
拓見　え？
私　私のためにそこまで動いてくれたんだよね。
拓見　ああ、うん。
私　「少女の目が黒いみずうみのように思えてきた。その清らかな目の中で泳ぎたい、その黒いみずうみに裸で泳ぎたいという、奇妙な憧憬と絶望とを銀平はいっしょに感じた。」
拓見　川端康成。

私　さすが。
拓見　でも俺ストーカーじゃないからね。銀平じゃないからね。
私　わかったわかった。で、風音はどこに？
拓見　土手。
私　え？
拓見　だったらびっくりなんだけど、スーパーで買い物をして、素麺かな？　なんか夕飯の材料を買った後、買い物袋をぶら下げたまま、お店に入って行った。
私　お店？
拓見　何屋なんだろう？　花屋かな、おしゃれな感じで、花だけじゃなくて、小物とか？　アンティークフラワーショップっていうのかな、ああいうの。
私　そこに入って行ったの？
拓見　うん。
私　それで？
拓見　それでおしまい。
私　え？　だって。
拓見　その日、小野風音はそこから出てこなかった。
私　裏口とかは？
拓見　見てみたけど、ない。
私　お店の名前は？
拓見　それが書いてなくてさ。場所はわかるんだけど、ネットでも情報ほとんどなくて。
私　ちょっとはあったの？
拓見　その場所にショップありますよね、くらいの感じ。
私　でも風音はそこから出てこなかったんだよね？
拓見　うん。
私　夕飯の材料買った後にそんなに長時間そんなお店にいないよね？　てことは、そのお店が風音の家？
拓見　その可能性は、高いかも。
私　あの年でお店持ってんの。
拓見　ますます謎だよね。
私　行ってみよう。

拓見　え？　今から？
私　夜の方が確実にいるでしょ？
拓見　まあ、そうかもしれないけど。
私　行こう。
拓見　またそうやってすぐ危険な橋を。
私　拓見は私が世の中と自分との距離を取りすぎてるって言ったけど、その危険な橋がさ、世の中と自分の間にかかってる橋なのかもよ。
拓見　渡れるならいいけどさぁ。
私　行こう。

私と拓見、去る。

○父が死んだ　墓前

四方司、丹下、蝶羽。

蝶羽　娘さんは？　大丈夫だったの？
四方司　お恥ずかしいことで。
蝶羽　私もあるよ。
四方司　え？
蝶羽　万引き。
丹下　いつの話です？
蝶羽　最近だったら問題でしょ？　学生時代。
丹下　学生時代なら問題じゃないってことはないと思いますけど。
蝶羽　本当にいちいち。
丹下　まあまあ。
蝶羽　まあまあ、は丹下さんのセリフじゃないでしょ。
丹下　まあまあ。
蝶羽　で。娘さんは何をとったんですか？
四方司　小説です。
蝶羽　小説？　本屋さんに並ぶあの？
四方司　そうです。その小説です。

丹下　随分可愛らしいじゃないですか。
四方司　可愛くなんてないですよ。
丹下　でもね、小説とは。
四方司　困ってしまいましたよ。小説は買ってあげてますし、その小説はなんなら妻が持っているものだったんです。うちにあるものをわざわざ万引きなんかして。
蝶羽　わかるなー。欲しいからとるんじゃないんだよきっと。気づいたらとってるの。
四方司　気づいたら。
蝶羽　ダメなことなんてわかってるんだよ。でもなんだろう。その衝動を止められないんだよね。
四方司　理性が効かないということなんでしょうか。
蝶羽　ちょっと違うかな、なんか、その瞬間だけ、もう一人の自分になってる感じ。
四方司　もう一人の自分。
蝶羽　なんかふわふわしてるっていうかさ、自分が自分じゃない感じっていうか、たまにない？　そういうの？
四方司　そうですね。かっこ悪い話ですが、昔、被害者を守るために、必要以上に犯人に拳を振り上げてしまったことがあります。その時は無我夢中で、ある意味もう一人の自分だったのかもしれません。
蝶羽　あるんだよね。生きてるとさ、もう一人の自分な瞬間がさ。
丹下　もう一人の自分、ですか。なるほどなるほど。つまりそうですね、光石五郎にも、もう一人の自分がいた。そういうことになりませんかね？
四方司　裏の顔、と言うことですか？
丹下　まあ、そんなところです。そしてそれは、「光石五郎は女を抱くためだけに金を稼いだ。」「光石五郎は３００人の美女に総額３０億円を貢いだ。」と言う噂につながっていくのでは？
四方司　……。
丹下　どうしてそんなに口をつぐむのですか？
四方司　逆にお伺いしますが、丹下さん、あなたの方こそどうしてそんなに光石五郎の本を出版することに固執するんですか？
蝶羽　確かに丹下さん、異常に五郎さんに執着してるよね。

丹下　そんなに執着しているように見えますかね。
四方司　まあ、傍目には。
丹下　はは。何ででしょうね。私も自分で疑問に思いますよ。この手紙を受け取ったのが僕だった。それは本当に偶然だったんです。宛名は「ご担当者様」でしたから。私以外の誰かが対応する可能性もありました。でも、この手紙は僕の元に舞い降りた。運命だと思いました。
蝶羽　何が運命なの？
丹下　蝶羽さんで二度目なんですよ。
四方司　二度目？
丹下　惚れた女性を光石五郎に奪われるのは。
蝶羽　どういうこと？
丹下　もう３０年も前の話です。学生時代、カフェでバイトをしていた私には、付き合っていた女性がいました。
蝶羽　へえ。
丹下　その女性の名前は、花輪桜。１０年前に事故で亡くなった光石五郎の妻です。

私、短、春日、そこに現れる。

私　お母さんと付き合ってたんですか？
丹下　……ああ、これは、いいタイミングなのか、悪いタイミングなのか。
蝶羽　タイミング、悪いでしょ。どう考えても。席外してもらう？　私たちが向こう行く？
丹下　んーどうしましょうか。私としては。
短　氷雨は聞く権利、ありそうな話な気がしましたけど。
蝶羽　丹下さんがいいならいいんじゃない？
四方司　ママ、大丈夫？
私　ママって呼ばないで！

間。

私　あ、ごめんなさい。突然怒鳴って。

四方司　あ、ああ。
私　なんかごめんなさい。なんかこのお話は、私、光石氷雨として聞きたいなって思って、そしたら、つい。
四方司　いや、ごめん。俺の方こそ配慮に欠けてたね。
私　あ、いや、全然そんなことじゃないんだけど。
短　大丈夫？
私　うん。ごめん。あの、差し支えなければ、続けて頂けますか？　私も知りたいんです。母のこと。
短　大丈夫？　氷雨、前みたいに。
私　大丈夫。大丈夫だから。
蝶羽　丹下さん的には問題ないの？　娘に聞かれても？
丹下　問題ありませんよ。むしろ、私が光石五郎に執着する理由を聞いてもらいたいです。
蝶羽　聞いてもらいたい。
丹下　私の思いを聞いて頂ければ、多少は協力して頂ける部分も増えるのではないかと思いまして。
蝶羽　じゃあいいんじゃない？
春日　あの、僕は？
丹下　ああ、この間いた氷雨さんのご友人の、
春日　春日です。
丹下　蝶羽さんから伺いましたよ。あなたも光石五郎に無関係という訳ではないようですし、聞いて頂きましょう。
春日　あ、はい。
私　お願いします。
丹下　（咳払いをして）花輪桜。大学に入って初めて入ったバイト先。彼女はそこで出会った先輩でした。テキパキ・ハキハキ、そんな言葉が似合う女性でした。その凛とした姿は、今でも鮮明にこの目に焼き付いています。
蝶羽　あのさ。
丹下　はい？
蝶羽　その喋り方なんとかならない？
丹下　え？
蝶羽　ちょっとアレ、鳥肌立つ。虫がこの辺をわさわさあって這ってるよう

な感じで。
丹下　というと。
短　喋り方が、あの、少し気持ち悪いかもしれないです。
丹下　え？　あ、ああ、すいません。でもとにかく、素敵な女性で、私なんかに興味を持つ訳ないだろうと思ってたんですけど、新人歓迎会の日も、ずっと隣で気さくに話しかけてくれて、まあ僕なんて、モテない男性の代表みたいな感じですから、そんなことされちゃうとすぐに惚れてしまって。
蝶羽　もっと普通に喋れない？
丹下　え？
蝶羽　さっきとはまた別のアレがあんの！
丹下　でも。
蝶羽　あとさ、必要？　その情報？　新人歓迎会で気さくに、とかモテない男性の代表がどうとか？　もっと核心を喋ってくれない？
丹下　いや、でも、僕の想いといいますか。
蝶羽　そういうのはさ、お店で酒飲みながら聞いてあげるから、ね。
丹下　そうですよね、すいません。私情が強すぎました。あ、でもひとつだけ。僕と彼女はともに文学が好きだったんです。芥川龍之介の話で盛り上がって。彼女も文学の話ができる友人というのは少なかったみたいで。それが交際のきっかけでして。
短　家系ですね。
丹下　え？
短　氷雨も好きなんですよ。文学。
丹下　そうなんですか。
私　好きって言う程じゃないですよ。
四方司　たくさん持ってるじゃないか。娘の三雪もなんですよ。
丹下　へえ。いいですね。血の繋がりってやつですか。
私　関係ないと思いますよ。家庭環境の問題です。
四方司　うちには本が溢れてますからね。環境の要因も大きいかもしれないです。
春日　氷雨ちゃんの周りには、文学好きが多いんだね。
短　類は友を呼ぶってやつじゃない？
私　友ではないけど。

丹下　花輪桜は小説家志望でした。僕はもともと自分で書くタチではなかったので、今もこうして編集の仕事をしていますが、当時も桜の書く小説を読んで感想を伝えたり、そんな日々が楽しくて仕方がありませんでした。

蝶羽　でも五郎さんに奪われたんでしょう？

丹下　そうです。そのきっかけも文学でした。光石五郎は僕たちがバイトをしているカフェでよく本を読んでいたんです。桜は、コーヒーを届ける際に、接客の一環として、本の話題をするようになっていました。小説家を目指していると言う話もしていたようです。光石五郎は彼女の夢を応援したいと申し出ました。出版社に知り合いがいるから会ってみないかと。

蝶羽　私もそうだった。

丹下　え？

蝶羽　私も、いつまでもキャバ嬢でやってけないし、スナックに移ろうかな、みたいな話をしたら、応援してくれて、紹介してくれて。

四方司　そんな話は俺もよく耳にしたかもしれない。

春日　みんなに優しい、いい人だったんですね。

丹下　それがわからないんですよ！　本当にただの好々爺なのか、狙いがあってそんなことをしているのか、僕には皆目見当がつかない！　ただ彼女はあの男に言われるまま夢に向かって走り出し、そのまま僕の元を去って行きました。気づいた時には、２０程も年の差のあった男と結婚まで決めてしまった。その上、蝶羽さんまで奪われて。

蝶羽　私はそもそもあなたのものになってないけどね。

短　でも大学時代の話ですよね？　大人の男に彼女を取られるって、結構あるあると言うか。

丹下　ええ、もちろんそういう考えもあるでしょう。光石五郎と桜の出会いが偶然ならば！

短　偶然じゃないんですか？

丹下　出版社に勤めた後、光石五郎と知り合いだったという編集者に会いました。桜のことも知っていて、会った事があると。その人の話を聞くと、光石五郎が文学に凝り出した時期が、光石五郎と桜が出会った時期と一致するんですよ！

四方司　お義母さんと仲良くなるために文学を読み耽っていたということですか？

丹下　そうです。はじめから桜を狙ってあのカフェにやってきたのかもしれません。それだけ周到な男だとしたら、噂だって本当かもしれないと思うじゃないですか。
私　周到、なんですかね。
丹下　え？
私　好きな女性に振り向いて欲しくて努力するのって、悪いことではない気がするんです。
丹下　それはポジティブな言い換えですよ。
春日　僕は少しいやらしく感じちゃう部分もあるかもしれません。
丹下　そうですよね？
蝶羽　でも桜さんは幸せだったんでしょ？　結果的にさ。
丹下　４０という若さで亡くなりましたが？
短　事故は仕方ないじゃないですか？
丹下　亡くなる前の桜は、どうでしたか？　四方司さん。
四方司　お義母さんは氷雨さんとの結婚を快諾してくれました。亡くなる前もいつも元気で、周りのみんなにパワーを与えて。事故は本当に突然のことで、周りのみんなが絶望したものです。
丹下　本当にそうですか？　四方司さん、どうですか？　教えてください。
四方司　あなたが期待しているようなことは何もないですよ。
丹下　何も、ないですか。
私　本当に？
四方司　何もないよ。
私　本当に何もなかったの？
四方司　どうしたんだ？
私　本当にお父さんのことで私に隠し事してない？
四方司　隠し事も何も、俺がお義父さんに会ったのは一度だけじゃないか。
私　そうだけど。
丹下　短さん、どうですか？
短　え？
丹下　隠し事はありませんか？
短　なに隠し事って？
丹下　シラを切り通すのですね。

短　言ってる意味がわかりません。
丹下　ならばいいでしょう。すいません。皆さん。僕、手紙の内容、１つ伏せていました。ここには、短さんと光石五郎の関係を疑う文書が書いてあります。この手紙を書いた者が柵田短と光石五郎の密会現場、ホテルに入っていく様子を見たと。
私　短？
丹下　どうですか？
短　知りません。本当に書いてあるんですか？
丹下　(手紙を見せて)ここです。ほら、ね。
短　知りません。
私　書いてあるからって真実とは限らないじゃないですか？
春日　そうですよ。無茶苦茶ですよそんなの。
丹下　本当に本当に会ったことはありませんか？　光石五郎に。
短　ないです。
丹下　四方司さん、四方司さんも心当たりはございませんか？　柵田短と光石五郎の関係に。
四方司　心当たりはありませんね。
丹下　氷雨さん？　どうですか？
私　短はお父さんに会ったこと、あると思います。
短　氷雨！
私　でも、多分小学校の頃とかの話で。だよね？
短　そうね。そういう意味なら会ってるかもしれませんよ。運動会とかありましたから。
丹下　私が言いたいのは、そういう事じゃないんですが。
私　お父さんと短が会ってたなら、私だって四方司さんだって気づきますよ。
丹下　そうですかね。

そこに種本が現れる。

種本　はい、こんにちは。光石五郎の関係者の皆様。警察でーす。
四方司　種本、どうしてここに？

種本　嫌だなぁ、四方司先輩が上のいうこと聞かないから俺が代わりに話に乗ったんじゃないですか。
四方司　お前まさか。
種本　四方司さんができなかった分も俺が昇進しておきますよ。

四方司、種本に掴みかかる。

四方司　お前にプライドはないのか！
種本　プライドでどうにかなる問題なんですか？　それとも先輩みたいにラーメン屋になれって言うんですか？　ねえ先輩。
四方司　そう言うことじゃない。
種本　後、この手早くどかした方がいいですよ。もう警官同士の喧嘩じゃなくて、公務執行妨害になっちゃいますから。
四方司　（手を離して）戦場の兵士だな。
種本　はい？
四方司　銃を撃ちすぎて感覚が狂ってしまっているんだ。かわいそうに。
種本　なんとでも言ってください。後、俺のことあんまり挑発しない方がいいですよ？
四方司　なに？

種本、私の方を見る。

私　え？
種本　一個秘密知っちゃってるんだよなぁー。先輩の。
四方司　お前まさか。種本！　頼む！　それだけはやめてくれ！
種本　どうしようかなー。
私　なんですか？
四方司　種本、やめてくれ。頼む！
種本　じゃあ先輩、俺の靴でも舐めますか？

四方司、固まる。

種本　どうしますか？

四方司、頭を下げる。

私　やめて！　何でそんなことするの？
短　そうですよ！　なんなんですかあなた！
春日　おかしいですよ絶対！
蝶羽　いきなり失礼すぎない？
種本　ヤイヤイうるさいなー。だから、言いましたよね？　警察です。
蝶羽　警察だからって何でもしていいと思ってるの？
種本　何もしてないですよ。するのはこれからです。
蝶羽　これから？
丹下　あなたさっき「光石五郎の関係者の皆様」って言いましたよね？　この手紙の件で来たんですか？
種本　手紙？

種本、丹下から手紙を奪おうとする。

丹下　ちょっと、やめてください！
種本　はい、警官に暴力振るわない。公務執行妨害で現行犯逮捕になっちゃいますよー。
丹下　暴力って。（諦める）
種本　（手紙を奪って読む）「光石五郎は女を抱くためだけに金を稼いだ。」「光石五郎は３００人の美女に総額３０億円を貢いだ。」「光石五郎が柵田短とホテルに入ったのを見た。」「愛人の一人は柵田短かもしれない。」「光石五郎の真実を本にしてください。」ふーん。んー……この手紙の差出人は誰です？
丹下　わかりません。匿名で寄せられたものですから。
種本　先輩、これ、どう思いました？
四方司　さあ。
種本　光石五郎について出版社に調べさせようとしていますね、これは。ねえ先輩。
四方司　そうだろうな。

種本　そして実際、この男が光石五郎の周辺を嗅ぎ回っている。
丹下　何か問題がありますか？
種本　いやいや、この手紙の差出人の目的は何なのかなーと思いましてね。
丹下　光石五郎の何かしらの被害者による告発、ですかね？
種本　告発にしては内容が薄い。つまり光石五郎が「何かよろしくないことをやってる」のは知っているが、それが何なのかはわからない状態と見ていいでしょうね。
丹下　そうかもしれませんね。
種本　念の為、この手紙が入っていた封筒などを調べさせてもらってもいいでしょうか？
丹下　え？
種本　差出人がわかるかもしれません。よろしいですか？
丹下　あ、はい。
種本　これ、私の名刺です。ここに連絡ください。調べに行きますんで。
丹下　はい。
種本　じゃあ先輩。次は先輩の番です。
四方司　俺の番？　何だ？
種本　光石四方司。光石五郎自殺教唆の容疑で重要参考人として署に来てもらいます。

間。

四方司　何を言ってるんだ？
種本　先輩が意識を取り戻した光石五郎に毒薬を飲ませたんですよね？
四方司　誰がそんなこと。
種本　「するもんか。」怖いですねぇ。人間、知らぬ間に大胆な行動を取ってしまうことがあるんですねぇ。さ、署までご同行願います。
四方司　何の証拠があって。
種本　詳しくは署の方で。
四方司　証拠なんてないんだな。いつものお前らのやり方か。
種本　詳しくは署の方で。
四方司　わかった。詳しく聞かせてもらおうじゃないか。納得するまでな。

種本　先輩の納得は関係ありませんよ。
私　四方司さん？
四方司　神に誓ってやってない。俺を信じてほしい。
種本　信じる神がいないから、光石家は代々この公営墓地に納骨してるんじゃなかったでしたっけ？
四方司　天地神明、ありとあらゆる神に誓ってということだ。
種本　ふうん。じゃあ行きますか。
私　やめて！

四方司、種本、去ろうとする。私が叫びながら止めようとする。

種本　何ですか！　別に逮捕しようって訳じゃない！　話を聞くだけです！

私、叫んで暴れ続ける。短、春日、止めに入る。

種本　先輩！　なんとかしてください！

四方司、頭を抱える。

種本　何なんですかこれは！
私　パパをつえてかあいえ！(言葉足らずな喋り方)
種本　は？
私　パパをつえてかあいえ！
種本　先輩！　一体なんなんですか！　黙ってないでなんとかしてください！

短、春日、ようやく私を引き剥がす。

私　みいかちゃん、なんでこおひとパパつえていくの？
短　ちょっとお話聞くだけだからね。別に何もされないから大丈夫だよ。
私　やあ。パパつえてっちゃやあ。
短　大丈夫。大丈夫だよ。

四方司　もう一人の氷雨だ。
種本　二重人格？
四方司　そうだ。
種本　先輩は知ってたんですか？
四方司　この少女の人格が、氷雨を守っている。
種本　守ってる？
私　ねえパパは？　パパはどこ？
短　四方司さん？　四方司さんなら、そこにいるでしょ？
私　あれ、パパじゃあい。パパじゃあいよ。
短　え？
私　あれ、ひさめのパパじゃあいよ。ひさめのパパはね。

丹下、私に近づいていく。

丹下　ねえ、もしかしてキミの言ってるパパってこの人じゃない？

ポケットから写真を出す。

私　あ、パパだ。パパどこ？
短　光石五郎の写真？
丹下　パパはね、今遠いところにいるんだよ。
私　遠いところ？
丹下　ねえ、パパに会いたい？
私　うん。会いたい。
丹下　おじさんが会わせてあげようか。
私　うん。
丹下　よしいい子だ。じゃあちょっとだけ僕の質問に答えてね。
私　しつおん？
丹下　そう。パパにいっつも遊んでもらってたの？
私　うん。
丹下　そうかそうか。パパとはいつも
四方司　やめてくれ！

丹下　なんですか？
四方司　頼む。
丹下　せっかく光石五郎の裏の顔を知るチャンスなんです。やめませんよ。
四方司　どうしてもか？
丹下　ねえ、パパとはいっつもどんなことして遊んでたの？
私　え？
丹下　パパとどんなことして遊んでたの？
私　えっとね、いっつも一緒にお風呂はいるの。それでね、お股をきえいきえいして、
四方司　やめろ！

四方司、私を抱きかかえて去る。叫ぶ私。

種本　先輩！

種本、追う。短、その場に座り込む。
間。

丹下　ちっ。だが今のはしっかり録音しましたよ。
春日　柵田さんは、知ってたの？　これ。
短　五郎さんが植物状態になった時と、桜さんが、氷雨のお母さんが亡くなってちょっと経った時も同じような感じになって。
春日　そうだったんだ。
蝶羽　丹下さん。よくあんなことできるね。
丹下　え？
蝶羽　おかしいよ。
丹下　真実のためです。
蝶羽　それは必要な真実なの？
丹下　はい？
蝶羽　誰が幸せになるのかな、この真実を追求して。
丹下　不倫をしてる男がいます。でも妻にはバレていません。子供も知りません。見かけ上は円満な家庭です。妻に不倫の事実を伝えるのは間違いです

か？

蝶羽　え？

丹下　そういう話でしょうこれは。殺人を犯した男がいます。でも妻にはバレていません。子供も知りません。見かけ上は円満な家庭です。妻に殺人の事実を伝えるのは間違いですか？

蝶羽　なんでそんなこと聞くの？

丹下　理解してもらうために、です。

蝶羽　へー。理解してもらいたいんだ。あの丹下さんが。

丹下　何が言いたいんです？

蝶羽　昔のあなたはもっと誇り高い男性だったと思うけど？　踏みつけられても、太陽に向かって伸びる名も無い雑草のように、ね。

蝶羽、１０万円をひらひらと地面に落とす。

蝶羽　あなたのおかげで、私、腐って落ちるギリギリで踏みとどまれそうだわ。ありがとう。

蝶羽、去る。

丹下　（お札を拾いながら）聞いたことがあります。幼少期の性的虐待が別の人格を生むことがあると。光石五郎の裏の顔はこれか。いや待てよ。だとしたら１９歳の桜はなぜ狙われた？　蝶羽さんはなぜ狙われた？　繋がらない。繋がらないな。柵田短！　柵田短！

短　なに？

丹下　先ほど運動会で光石五郎にあったと。短さんもしかしてあなたも。

短　あなたは勘違いしてます。

丹下　え？

短　光石五郎は小児性愛じゃありませんよ。氷雨のもう一つの人格も、性的虐待によって生まれたものじゃない。

丹下　今更そんな言い訳は聞きたくありませんよ。先ほどの光景を見てその言い訳を信じろと？

短　さっきの氷雨を見て、あなたが勝手に五郎さんが幼い氷雨に手を出し

たと思っているだけじゃないんですか？

丹下　あなたも聞いてたでしょうあの発言を！　ここに録音も残っています！　勝手な憶測と言うレベルですかこれが！　言い逃れはできませんよ？

短　変なことを書かれると嫌なんで、私が知ってることを話します。

丹下　話してもらおうじゃないですか。ただし！

短　ただし？

丹下　嘘偽りない真実をお話し願いしますよ。

短　もちろんです。私の知ってる限りの真実を話しますよ。

丹下　ええ。

短　ますあなたが知らなければならないこと。それは、「光石五郎と光石氷雨は、純粋に愛し合っていた。」と言うことです。

丹下　……は？

短　高校生の時、氷雨に相談されましたから。「お父さんのこと好きになっちゃったんだけどどうしよう。」って。

丹下　高校生？　じゃあさっきのはなんだったんだ！

短　それは私にはわかりません。でも私が知ってる事実はそうです。

丹下　それだって重大な問題だ！　そもそも光石五郎には桜が。

短　光石五郎はポリアモリーだったんです。

丹下　ポリアモリー？

短　誠実に複数の人を愛する。

丹下　……ポリアモリーの意味なら知ってますよ、浮気性なだけじゃないか、そんなもの。

短　いいえ、ポリアモリーは愛のあり方の一つです。

丹下　ふざけた考え方です。

短　桜さんも氷雨も、私も、同意の上で五郎さんとお付き合いをしていたんです。ただ氷雨は、五郎さんが植物状態になった時にあの状態になって記憶をなくしてしまいましたが。でも私たちは、いえ、五郎さんの周りにいたのは愛人なんかじゃありません。みんな純粋に愛し合っていたんです。

丹下　同意があったからなんだ？　浮気性仲間でつるんでるだけじゃないか！　野蛮な集団だ！

短　野蛮？　何が野蛮なんですか？　多様性を認めず、自分の考えにそぐわないものを排除するあなたの方がよっぽど野蛮じゃないですか！

丹下　気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い！　なんだそれは！　そんなものが許されてたまるか！　現代日本だぞここは！　そんな一夫多妻制みたいな事が許されるものか！

短　許すとか許さないとか、そんな話じゃないのわかってます？　世間がどう見るか、国がどう見るか、そんなことは後からついてくる話です。大事なのは、今生きている私たちが何を考え、どう行動しているか、ただそれだけじゃないですか？

丹下　違う！　そんなものは正しくない！　「今生きている私たちが何を考え、どう行動しているか」だって？　現実はそうはいかないんだ！　少数派の矜持なんてなしのつぶてだ。世に一石投じることなんてできやしないんだ！

短　本心で言ってますそれ？

丹下　え？

短　あなたこそ少数派の矜持側の人間じゃないんですか？

丹下　違う。僕は編集者だ。作家じゃない。作家が持つ独創性を大衆にわかりやすくしてやるのが僕の仕事だ。少数派の矜持じゃこの仕事はできない。

短　そうかもしれませんけど、編集者って、同時に作家の一番の理解者じゃないといけないんじゃないですか？

丹下　……。

短　私は光石五郎の愛人ではありませんが、五郎さんと親しくさせて頂いていました。それは私が五郎さんの考える愛の形に共感していたからです。桜さんも、その一人だった。そしてこれは私の憶測ですが、桜さんのことですから、あなたにも提案があったんじゃないですか？　同時に交際しませんかと。

丹下　……あったさ！　あったが、受け入れられるわけないだろう！！！「私、同時に複数の人を愛するタイプなの」なんて！　いかれてる！　頭がおかしい！　僕の理解の範疇にそんなものはない！　僕にはただ光石五郎との浮気を認めてくれと言われているようにしか聞こえなかった！

短　私、思うんですけど。浮気や不倫じゃないから、誠実な愛だったからこそ、五郎さんの周りから、暴露話のようなものが出なかったんじゃないですか？

丹下　……。

短　それでも、まだ本の出版がしたいですか？
丹下　……光石五郎は自分の娘に手を出している。ポリアモリーだなんだと言っても、それは悪です。
短　それも個人の考え方です。
丹下　そんな範疇の話じゃないと思いますが？
短　じゃあ！　憶測かもしれませんが！
丹下　憶測？
短　丹下さんのお話を聞いて思ったんですけど、実の娘から親への恋愛感情って、親子の愛の勘違いみたいなことが多くて、次第に薄れていって男女の関係には至らない場合がほとんどらしいんです。
丹下　何が言いたいんです？
短　氷雨のお父さんは本当に五郎さんなんでしょうか？
丹下　それはどういう。
短　氷雨と五郎さんに血縁関係がないとしたら？
丹下　そんなわけ。
短　でも！　桜さんと氷雨の血は繋がっているとしたら？
丹下　それは。
短　氷雨が生まれたのは五郎さんが桜さんと結婚してすぐのことです。もしかして氷雨は。
丹下　待ってくれ。それ以上は言わないでくれ。吐きそうだ。
短　調べたいですか？　その真実を。
丹下　やめてくれ。

間。

短　丹下さん。その手紙の差出人。
丹下　え？
短　その手紙の差出人も、丹下さんと同じで、色んな常識に縛られて、見たくない真実から目を逸らしている人間の一人なんじゃないですか？　ねえ、春日くん。
春日　え？　ああ、うん。そうだね。
短　三雪ちゃん、迎えに行かなきゃね。

春日　え？
短　お父さんとお母さんが大変な状態でしょ？
春日　あ、そうだね。夕飯くらい。あ、あれだよね？
短　なに？
春日　三雪ちゃんは、氷雨ちゃんと光石五郎の子供だったってことだよね？
短　(丹下を見てから)そうだね。
丹下　いかれてる。
短　そう？
丹下　四方司さんは知ってるんですか？
短　もちろん。四方司さんが、氷雨を救ってくれたんですから。
丹下　救ってくれた？
短　ほら、春日くん、もう行かなきゃ。
春日　ああ、うん。

短、春日、去る。

丹下　(墓に向かって)なあ桜。お前はさ、光石五郎を愛しながら、同じくらい俺のことも愛してくれていたのかな？

暗転。

○母が死んだ　アンティークフラワーショップ

私、拓見、風音。

風音　だからあなたのお父さんは光石四方司じゃなくて光石五郎なの。
私　お父さんはお父さんじゃなかった？
拓見　本当ですか？
風音　本当だよ。あなたの、三雪ちゃんのお父さんは光石五郎。資産家で好々爺でポリアモリー。

間。

三雪　お父さんは他人なんだ。
風音　血の繋がりは、ないよ。他人かどうかはあなた次第。
三雪　そっか。私次第。私がお父さんをどう思うかは自由なんだね。
風音　そうだよ。
三雪　……それが秘密？
風音　そう。
三雪　そっか。
風音　なんか嬉しそうじゃない？
三雪　別に。
風音　そう？
三雪　なんかおんなじじゃんって思ってさ。
風音　おんなじ？
三雪　お母さんもお父さんも私と同じ人間じゃんって。
風音　どういうこと？
三雪　なんか私、お父さんとお母さんって「お父さん」と「お母さん」って存在としてみてたんだよね。私ってさ、何しても私じゃん？　当たり前だけど。朝起きるでしょ？　トイレに行く私。歯を磨く私。どっちも私なんだよ。仮にいつも歯を磨くのが先だったとして、たまにトイレに先に行ったとしても、トイレに行った方の私もちゃんと私なんだよなって思ったの。だからお母さんは何してもお母さんだし、お父さんは何してもお父さんなんだなって。それで今、目の前のお父さんがお父さんじゃなくなることなんてないしね。
風音　開き直りだね。
三雪　おじいちゃんがよく言ってたんだって。「人生は開き直った奴が最強だ」って。
風音　そうかもね。
拓見　なんか、すごいよ。光石は。
三雪　え？
拓見　俺、全然自分の話じゃないのに、今の話聞いて、びっくりして、なんか受け入れられなくて、もし自分だったら、そんな風に開き直れるのかなって思って、多分俺、自分の話だったら、この場に立ててないよ。逃げ出してる、きっと。だから光石はやっぱりすごいよ。
三雪　すごくなんかないよ。それにさ。

拓見　それに？
三雪　拓見がこういう時めっちゃ普通の反応してくれるの、助かってるかも。
拓見　え？
三雪　ねえ風音。
風音　なに？
三雪　やっぱり醜いアヒルの子は、白鳥の友達ができるから幸せになれたんだね。
風音　そうだよ。
拓見　醜いアヒルの子？　え？　俺が醜いアヒルの子？
三雪・風音　違うよ。（顔を見合わせて）……ねー！
拓見　なんか、疎外感。
風音　美雪ちゃんは君に助けられてるってことだよ。
拓見　え？　そ、そうなの。
三雪　ちょっと、ね。
拓見　そうか、そ、それでさ、光石のお母さんとお父さんはどうなったんですか？　お父さん、逮捕されちゃったんですか？
風音　それは、そこで盗み聞きしてるお姉さんに聞いてみたら？
三雪　盗み聞き？
拓見　え？

朱美、入ってくる。

朱美　申し訳ございません。別に盗み聞くつもりでは…。
風音　別に責めてないよ。ここお店だし、誰でも入ってきてもらって大丈夫。
拓見　すいません。あなたは。
朱美　申し遅れました。県警の菅原朱美と申します。三雪ちゃんのお母さん、光石氷雨さんの死について調査しておりまして。
拓見　やっぱり自殺じゃないってことですか？
朱美　その可能性が高くありまして。
三雪　何かわかりましたか？
朱美　光石五郎と県警上層部の関係が少し。
風音　教えてくれるの？

朱美　え？
風音　私たちに教えてくれるの？　盗み聞きの代償？
朱美　……。多分、先輩も知ってることだから。
三雪　おじいちゃんは、光石五郎は、何をしていたんですか？
朱美　一言で言うと、光石五郎は、どうやら県警の裏金づくりに協力していたようです。
三雪　裏金作り？
朱美　光石五郎は本業の傍ら覚せい剤や麻薬の密売を行っていました。そこで得たお金を賄賂として県警上層部に渡しつつ、県警はそのお金を裏金としてプールしていく。さらに光石五郎は定期的に狙った犯行グループを検挙させ、切り捨てることで、県警上層部と密な関係を築いていたようです。
三雪　なんか現実感がありませんね。
朱美　え？
三雪　ドラマの悪役みたい。
朱美　そうですね。
拓見　じゃあ、光石のお父さんは、それを知ってて光石五郎に近づいてたんですか？
朱美　四方司先輩は、県警の裏金作りに反対の立場でした。２４歳で巡査部長に昇任。その後、筆記試験ではトップに近い成績をおさめていたにも関わらず、昇任の機会を与えられなかった不遇の巡査部長。それこそが、県警からの圧力の証明でした。
三雪　それでラーメン屋に？　でも、おじいちゃんは？
朱美　四方司先輩は最初、県警の悪を暴くために光石五郎に近づいたようです。しかしそこで見たのは、特殊な形ではありつつも、幸せな家庭でした。光石五郎は、家族の、そして愛する女たちの幸せのために金を稼いでいたのです。光石五郎の悪を暴くことで不幸にしてしまう人間があまりにも多すぎることに、先輩は気づいてしまったんだと思います。

私、拓見、風音、去る。

○母が死んだ　墓前

朱美と四方司。

朱美　どうして黙ってたんですか？
四方司　朱美さんは、正義感が強すぎるから。
朱美　正義感、ですか。
四方司　え？
朱美　いや、なんでもないです。……光石五郎はどんな人物だったんですか？
四方司　気のいい好々爺。それ以上でもそれ以下でもないさ。県警との繋がりや薬の売買だって、持ちかけたのは県警上層部だ。
朱美　腐ってますね。
四方司　正義のために警官になる人間が何人いる？　仕事のために仕事をする人間が何人いる？　現実の前に志が折れる人間を俺は何人も見てきた。
朱美　それで辞めたんですか。
四方司　疲れてしまっていたんだ。絶望してしまっていた。生きることそのものに。こんなに汚いことをして生きていくなら、死んだほうがマシだ。そう思って死ぬ気で飛び込んだ光石五郎の家。そこにあった光景が、当時の俺には眩しすぎた。
朱美　その輝きの奥にくすみがあったとしても、先輩にはそれを指摘できなかったんですね。
四方司　そうだ。その点、種本という人間は、割り切って働いている。心の整理が得意な男だ。俺は中途半端だったなぁ。
朱美　先輩の方が人間味がありますよ。
四方司　そうだなー。
朱美　種本はバケモンです。戦場の兵士、です。
四方司　……。戦場の兵士。
朱美　種本が私に言ってきました。
四方司　種本が？
朱美　意外ですよね。
四方司　あいつにも人の心はあったんだな。
朱美　え？
四方司　光石五郎の自殺教唆で俺を県警が無理やり引っ張ろうとしたことがあった。種本自らお出迎えだ。だが、その話は立ち消えになった。

朱美　どうしてですか？
四方司　種本が進言したんだろう。俺を引っ張れば、県警の悪事を告発されかねないと。県警としては俺をパクって監視下に置いた方が安全と考えたようだが、種本が反対してくれたようだな。
朱美　あの種本が？
四方司　ああ。あの種本が、だ。まあ、合理的に考えた結果かもしれないが。
朱美　先輩。もう一個聞いていいですか？
四方司　なんだ？
朱美　どうして、氷雨さんと結婚したんですか？
四方司　どうして？
朱美　あくまで最初は県警の告発のために光石家に近づいたんですよね？
四方司　ああ、そうだな。
朱美　そこからどうして。
四方司　光石五郎が事故にあって植物状態になっていたのは知っているな。
朱美　はい。意識が戻ってすぐに自殺したって。
四方司　その時、あまりのショックに生まれたのが氷雨の少女人格だった。
朱美　……そこで生まれたんですか。
四方司　あの時は少女人格から元に戻るのにかなりの時間を要した。週7日のうち、まともに話せるのは1日か2日。そんな毎日が続いた。氷雨のお腹の中には既に三雪がいたからな。あの状態では子育てもままならないと思ったんだ。
朱美　それで結婚ですか？
四方司　俺の方も、毎日付き添う内に、彼女に惚れ込んでいったのは事実だよ。それは同情ではなかったと思っている。
朱美　本当に同情ではなかったと言い切れますか？
四方司　仮に同情だったとしても、今はもうそうじゃない。純粋に氷雨を愛していたと言える。それでいいじゃないか。
朱美　そうですか。
四方司　だから、信じられないんだよ。彼女が自殺なんてするとは思えない。
朱美　その件ですが、
四方司　何かわかったか？
朱美　種本はこの件から手を引きました。

四方司　え？

そこに種本が現れる。

種本　報告が早いなー。
朱美　種本……さん。
種本　別にいいけどね、裏で呼び捨てにされてるのはちょっとショックよ。
朱美　申し訳ございません。
四方司　この件から手を引いたというのは？
種本　光石氷雨の死に、県警のあれこれは関係ないってことがわかったんですよ。
四方司　処理が終わっただけじゃないのか？　あのホテルで何をしていた？
種本　信じてもらえないと思いますが、別の悪いことをしていました。
四方司　別の悪いこと？
種本　あの日、とある大物政治家があのホテルで売春をしていましてね。その警備についていたんですよ。
四方司　そんなもの信じられるわけ。
朱美　なんで種本さんがあっさり吐いたと思います？
四方司　え？
朱美　逮捕されました。その政治家。
四方司　岡田城太郎？
朱美　ノーコメントでお願いします。
種本　ほんと後処理大変だったんですからねー。
四方司　じゃあ、本当に自殺？
種本　いや、そこはどうですかね？　突き落とされた可能性の方が高そうでしたよ。まあ割とずさんな犯人なようで、逮捕も時間の問題かと。本当に、もうすぐです。詳しくは言えませんがね。
四方司　氷雨は、どうして殺されたんだ？
種本　長い付き合いのよしみで少しだけ。氷雨さんはどうやらあなたを愛していたようです。
四方司　え？
種本　魅力的な女性が一人の男を愛す、これトラブルの元、らしいですよ。

四方司　それが氷雨の殺された理由？
種本　まあまた逮捕後にでも菅原から聞いてください。
四方司　じゃあお前は何しに？
種本　ご挨拶です。異動になりまして。
四方司　異動？
種本　もっと上に行くためです。
四方司　相変わらずだな。
種本　ねえ先輩。もう少し上に行くまで、告発は待っておいてくださいよ。
四方司　なに？
種本　どうせ告発されるなら、先輩に告発されたいじゃないですか。
朱美　何ですかそれ。
種本　「その時」まで待っててください。
四方司　「その時」にはジジイの戯言にしかならないだろ。
種本　そうならないように急ぎますよ。
四方司　期待せずに待ってるよ。
種本　ああ、それと、これ。

一冊の本を渡す。

四方司　これは？
種本　出版までは至りませんでしたが、ここまで形になったみたいですよ。
四方司　光石五郎の。
種本　そうです。最後の方読んでみてください。
四方司　最後の方？
種本　ちょっとね、柄にもないことを、したくなりましてね。丹下という男にも協力させて、粋な計らいでもしようかと思いまして。
四方司　何をするつもりだ？
種本　三雪ちゃんも呼びましょう。一生の思い出にしてあげますよ？　先輩。
四方司　気色悪い、何をするんだ。
種本　これでも先輩にはお世話になったと思ってるんですよ。ほんの恩返しです。
朱美　あの、この人、こんな言い方しかできないですけど、割と今回そのち

やんとしたことを。
種本　黙っててもらえる？　で、三雪ちゃん呼んできてもらっていい？
朱美　はい！

種本、四方司、朱美、去る。

○母が死んだ　墓前

春日と短。

短　早すぎるよね。
春日　うん。
短　偶然だけど、氷雨のお母さん、桜さんも４０歳で亡くなったって。
春日　偶然、なのかな。
短　え？
春日　いや、なんでもない。
短　そう。
春日　あ、そうだ柵田さん、結婚したんだって。おめでとう。
短　ありがとう。
春日　お相手は？
短　５個も年下。びっくりだよね、年下に惚れるなんてさ。
春日　年上っぽい。
短　ね。まあ年取ったからなー。年下って言ってもおじさんだからねー。
春日　ま、それは、そうか。
短　苗字、長野だよ。長いのか短いのか。
春日　長野になるんだ。
短　氷雨も結婚式に呼びたかったんだけどなー。
春日　そうだよね。
短　春日は？
春日　え？
短　未だに氷雨のこと忘れられないの？
春日　そんなことないよ。

短　そんなことなくなさそうな顔じゃん。
春日　本当に。そんなことないから。
短　ねえ、今だから聞くけどさ。
春日　なに？
短　もう9年くらい前かな。氷雨のお父さんの本を出せ、みたいな手紙が出版社に届いたことあったじゃない？
春日　うん。あったね。あの時は、びっくりしたよ。急に巻き込まれて。
短　あの手紙、春日じゃない？
春日　え？
短　目的はわかんないけどさ、アレって五郎さんじゃなくて、氷雨のことを調べるためにあんなことしたんじゃないの？
春日　なんで、そう思うの？
短　あの手紙、柵田って書いてあったでしょう？
春日　うん。
短　私、高校で両親離婚してるから、柵田じゃないんだよね。
春日　え？
短　だから、柵田短って書くってことは、中学より前の知り合いなのかなーって思ったりして。
春日　ああ、そうだったんだ。
短　でさ、春日なら、通りすがっても知り合いだって私気づけないからさ。見た目変わっちゃってて、ね。
春日　面白い推理だね。でも、それだけで僕が書いたっていうのは無理があるんじゃないかな。書く理由もないしね。
短　そっかー。なかなか名推理だと思ったんだけどなー。
春日　急に怖いトーンで話すからドキッとしたよ。
短　ねえ、本当に春日じゃないの？
春日　だから違うって。
短　氷雨のことは？　好きだった？
春日　それも違うって。
短　本当に？
春日　いや、そりゃ、好きだったよ。昔は、好きだった。今も、ね。意味合いは違うかもしれないけど、好きだよ。

短　じゃあなんで？
春日　え？
短　じゃあなんで氷雨のこと殺したの？

朱美と種本が出てくる。

種本　わざわざこんな茶番に付き合うことないんだよ。
春日　え？
朱美　最後に御墓参りくらいはっていう、長野さんの想いじゃないですか。
種本　墓参りなんてしたって故人がどうにかなるわけじゃないんだから。
朱美　違いますよ。墓参りは、自分のためにするんです。残されたものが、気持ちを整理するために行くんです。前を向き続けるためにするんです。
種本　御託は結構。春日十夢、光石氷雨殺害の容疑で逮捕しまーす。
春日　は？　ちょっと待って。

朱美、春日を取り押さえる。

春日　柵田さん！　僕を騙したの！　ねえ！　なんで！　なんで！
短　騙した？　私はただ正直に言って欲しかっただけだよ！
春日　違う！　違うんだよ柵田さん！　僕は純粋に氷雨ちゃんが好きだっただけなんだ！
短　好きだったならどうして？
春日　殺すつもりなんてなかったんだ！　だってポリアモリーなんだろ？　僕のことも好きになってくれたっていいじゃないか！　ただ僕はそういう建設的な話をしたかっただけなんだ！
短　何が建設的なの？　何にもわかってない。春日に人を好きになる資格はないよ。
春日　資格がないってなんだよ！　僕が何年好きだったと思ってる？　人生を懸けて好きだったんだよ？　そんなことが柵田さんにできる？　ポリアモリーだとか言って男を取っ替え引っ替えしてたような奴に。

朱美、春日をビンタする。

黙る春日。

種本　はい連れてってー。うるさいから。

短　すいません。ご迷惑おかけしました。

朱美　長野さんにも後ほどお話しを伺いに参りますので。

短　はい。すいません。

種本　こっちで最後の事件がこれとはねー。夢のない終わり方だ。

暗転。

◯父が死んだ　夢か現か

氷雨と四方司。

氷雨　ごめん。

四方司　謝る事はない。

氷雨　私ね、三雪が生まれてから、ううん。お父さんがいなくなってからずっとおかしくて。

四方司　おかしくなんてないよ。

氷雨　なんか、私ってなんなんだろうってすごく思ってて、四方司さんもいっつもママって呼ぶし、だいたい光石さんって呼ばれるし、この間久々に春日くんが「氷雨ちゃん」って呼んでくれて、ああ、そうだよね、私は氷雨だよねって確認しちゃう感じで、でも「氷雨ちゃん」ってどんな子だったっけって思って。１８で三雪が生まれてから「氷雨ちゃん」は死んじゃったんじゃないかなとか思って、私しか「氷雨ちゃん」を守ってあげられないはずなのに、私しか「氷雨ちゃん」を知らないはずなのに、その私が「氷雨ちゃん」がなんなのかわかんなくなっちゃって。

四方司　いいんじゃないかな。

氷雨　え？

四方司　俺も、わかんないよ。「四方司」がどんなやつなのか。氷雨と一緒にいるときの俺。警察時代のやつらといるときの俺。犯人を前にしたときの俺。ラーメンを作ってるときの俺。三雪と一緒にいるときの俺。全部きっと違う

俺に見えるだろうしね。でも、それでいいんじゃないかな。それが全部俺なんだよ。氷雨も、お父さんといるときの氷雨。三雪といるときの氷雨。俺といるときの氷雨。春日くんといるときの氷雨。いろんな氷雨がいてさ、それでいいんだよ。全部があって氷雨だし、俺はそんな氷雨を全部ひっくるめて愛しているよ。

氷雨　なんでそんなに優しいの？

四方司　それが氷雨といるときの俺だからね。

氷雨　(笑う)ごめんね。

四方司　謝るなよ。

氷雨　うん。ありがとう。

四方司　さ、三雪のとこへ行こうか。

氷雨　うん。

氷雨と四方司、去る。

○父が死んだ　墓前

丹下と蝶羽。

丹下　不倫を暴くのが、殺人を暴くのが間違いか、みたいな話を前に話したこと、覚えてますか？

蝶羽　イラっとしたから。覚えてるよ。

丹下　わからなくなってしまいました。何が正解か。僕が何をしたかったのか。

蝶羽　そんな話ならお店の方に来てちょっとでもお金落として貰えると嬉しいんだけど。って毎回言ってるけど来てくれない。

丹下　すいません。でも、ここが、桜の墓の前が良かったんです。

蝶羽　丹下さんはね、自己陶酔が激しすぎんの。

丹下　自己陶酔？

蝶羽　いい歳でしょもう。しっかりしなって。

丹下　僕は光石五郎に悪人であって欲しかったんだと思います。

蝶羽　そうね。

丹下　すぐに釈放されましたけど、四方司さんが警察に連れて行かれた事実も使って、調査費を得て、しらみつぶしに色々しました。「光石五郎は女を抱くためだけに金を稼いだ。」「光石五郎は３００人の美女に総額３０億円を貢いだ。」それを本にすることは可能です。３００人近い女性との交際歴、３０億近いお金をそれぞれの幸せのために使っていたという事実。その情報を仕入れることができました。でも。

蝶羽　女たちを幸せにするために命を使った五郎さんの人生は、あなたが書きたいものじゃないってことね。

丹下　そうです。

蝶羽　ちょっとだけわかるよ。

丹下　え？

蝶羽　私も光石五郎に複数交際、持ちかけられたことあるから。

丹下　やっぱり、そうだったんですね。

蝶羽　断っちゃったけどね。今思えば、受けておけばお金には苦労しなかったのになーって思うけど。

丹下　どうして断ったんですか？

蝶羽　耐えられなくない？　自分の好きな男が、公然と自分以外の誰かを好きで、公然と自分以外の女とセックスするなんて。

丹下　耐えられないです。

蝶羽　お金をもらってもそれは耐えられないと思ったから断ったの。

丹下　強いですね。

蝶羽　強くなんてないでしょ。意地はってるだけ。だから行き遅れんの。

丹下　実際、ポリアモリーへの理解をできぬまま、お金のためだけに交際を受け入れた女性も多かったみたいです。でもそれで光石五郎が女性を批判する事はなかったし、女性たちも光石五郎を責める事はなかった。

蝶羽　世の中にはいるんだよねー。そういう、天性の人たらしがさ。

丹下　今ならなぜ桜が光石五郎に惹かれたのか、わかるような気がします。

蝶羽　いい男だったよ。

丹下　そうですか。

蝶羽　本は？　どうするの？

丹下　光石五郎には実の娘と呼べる人間が氷雨さんの他にももう一人いました。

蝶羽　桜さんと結婚するより前に付き合ってた人との子？
丹下　そうです。
蝶羽　氷雨さんのお姉ちゃんになるの？
丹下　いえ、生まれたのは氷雨さんより後だそうなので、妹になります。
蝶羽　四方司さんや氷雨さんは？
丹下　おそらくそのことを知らないはずです。僕は彼女に会いに行きましたが、彼女は自分の存在を隠したがっていました。
蝶羽　どうして？
丹下　自分の存在が氷雨さんや四方司さん、桜の、負担になるのを避けたかったんだと思います。
蝶羽　その子の名前は？
丹下　小野風音。

蝶羽、丹下、去る。

○母が死んだ　アンティークフラワーショップ

三雪、拓見、風音、朱美。

三雪　お父さんは？
朱美　四方司先輩ですか？
三雪　はい。お父さんはどこにいますか？
朱美　種本と一緒にお墓の前にいるかと思います。
三雪　お父さんと、話したいです。
風音　そうだよね。話したいよね。
三雪　うん。
風音　ちょっとだけ聞いてもらえる？
三雪　なに？
風音　私、もうここから引っ越すから。
三雪　え？　なんで？
風音　準備終わったから。
三雪　準備？

風音　私たちは一緒にいない方がいいと思う。
三雪　なんで？　お父さんだってきっと会いたいと思ってるよ？
風音　私はひっそり生きて行くのが似合ってるし、好きだから。
三雪　でも。
風音　ねえ、三雪ちゃんのお母さん、つまり私のお姉ちゃんはきっと、三雪ちゃんのことをちゃんと愛してたと思うんだ。
三雪　うん。
風音　でもお母さんになるのが早すぎちゃったから、色々まだ大人になりきれてない部分とかがあって、それがちょっと三雪ちゃんの負担になっちゃった部分もあるかもしれない。
三雪　うん。
風音　私、本当は陰ながら見守ること以外のことはしないようにしようって思ってたんだけど、三雪ちゃんが話しかけてくれたのもあって、私も三雪ちゃんの力になれることがあればって思って出しゃばっちゃった。ごめんね。
三雪　謝らないでよ。
風音　昔、お姉ちゃんにもつきまとってた事があるんだけど、お姉ちゃんは私に話しかけては来なかった。でも三雪ちゃんは話しかけてきた。２人はとってもよく似た顔なのにね。ねえ、人間って面白いよね？
三雪　うん。面白い。
風音　ねえ、握手していい？
三雪　もちろん。

握手を交わす。

風音　「痛いですよ。」

風音を抱きしめる三雪。

三雪　ダメだよ！　やっぱりダメ！　引っ越しちゃダメ！　一緒にお父さんのところに行こう！
風音　なんで？
三雪　井上ひさしの「握手」。ダメだよ！　最後「痛いですよ。」って言って

ルロイ修道士は死んじゃうんだよ！　そんなのダメ！　風音は生きるの。一緒に生きるの！

風音　さすがだねぇ。さすがお姉ちゃんの子供だ。

暗転。

○エピローグ　墓前

手を合わせる四方司と三雪。

四方司　仕事は大丈夫そうか？

三雪　まあまだ内定者研修とかしかやってないからわかんないけど、まあまあかな。

四方司　まあまあだってさ。

三雪　お父さんは？

四方司　まあまあだな。

三雪　嘘？

四方司　ついにロコミの評価が3を超えた。

三雪　やったじゃん。ロコミ3超えだってさ。

花火の音が聞こえる。

三雪　花火大会？

四方司　そうみたいだな。

三雪　あの時の花火、綺麗だったね。

四方司　ああ。

三雪　警察ってあんなことしていいの？　お墓で花火なんて。

四方司　県警の闇の一つだな。

三雪　芥川龍之介の「舞踏会」みたいに、おじいちゃんはお母さんと花火を見たかったんだよね。

四方司　丹下さんの話だと、そういうことらしい。自分で花火を作ろうと炎色反応を調べる大学の教授まで尋ねるんだから、すごいよな。

三雪　お母さんを喜ばせるためだけにね。
四方司　すごいことするよ本当。
三雪　お父さんの後輩もね。
四方司　ああそうだな。本当に花火を打ち上げるとは思わなかった。
三雪　大物になる？
四方司　あれは大物になるな。
三雪　炎色反応。
四方司　ん？
三雪　花火の原理。
四方司　ああ。
三雪　同じ炎でも当てる金属によって色が変わる。
四方司　人間みたいだな。
三雪　ね。人間みたいだね。
四方司　いろんな色があるから、面白いんだ。
三雪　ねえお父さん。
四方司　ん。
三雪　私、おじいちゃんを殺したの、お母さんだと思うな。
四方司　え？　おいおい急に何言ってるんだ。
三雪　私だったら、そうすると思うから。
四方司　どうして？
三雪　おじいちゃんに頼まれたんだと思うの。
四方司　殺してくれって？　まさか。
三雪　ありえると思うなー。おじいちゃんって誰かのために生きたい人でしょう？　嫌だったんじゃないかな、誰かのお世話になって生きるのが。
四方司　なるほどな。
三雪　あとね。
四方司　今日は止まらないな。
三雪　お父さんに言い残したことないようにしたくて。
四方司　一生会えなくなるわけでもないのに。
三雪　もう一個。
四方司　なんだ？
三雪　お母さんの二重人格ってウソだと思うの。

四方司　何をまた。
三雪　私だったらそうするから。
四方司　またそれか。
三雪　だって、おじいちゃんを殺したのがお父さんってなったら、その人格が出てきたんでしょ？
四方司　ああ。
三雪　そのあとはもう出てないんじゃない？
四方司　そのあとは何事もなかったからな。
三雪　おじいちゃんを殺したのがお母さんだったから、そんなことをしたんだよきっと。
四方司　三雪は、あの頃のママを見てないから。
三雪　お母さんはお父さんが普通の人だったから、普通じゃないおじいちゃんに悪者になってもらったんだよ。
四方司　悪者に？
三雪　手っ取り早く人が納得する方法は、何が悪かを決めることだよ。
四方司　トンデモ推理だ。
三雪　そうかな～。二重人格だってなったから、いろんな事が丸く収まったんじゃない？
四方司　それを狙ってたって？
三雪　そういうこと。
四方司　そういうことだってよ。
三雪　全部スッキリしたからお母さんはもう演じるのをやめたんだよ。
四方司　三雪は小説家には向いていても、警官には向いてないな。
三雪　あってると思うけどなー。
四方司　あってても間違っててもいいさ。
三雪　まあね。
四方司　ママはすごいな。
三雪　そう。すごいの。
四方司　すごいってよ。
三雪　ねえお父さん。
四方司　ん。
三雪　お父さん大好き。

四方司　なんだ急に。
三雪　いいじゃん。
四方司　まあ。
三雪　ねえお父さん。
四方司　ん。
三雪　行ってくるね。
四方司　ああ。拓見くんにもよろしくな。
三雪　うん。
四方司　体に気をつけて。
三雪　ねえお父さん。
四方司　ん。
三雪　お父さん大好き。

２つの墓に照明が当たって、暗転。

幕